新女界

主筆 安井哲子

○美はしき感化の實驗（一）……安井哲子
○嗚呼金森小壽夫人（一三）……聖山生
▽誌友金森小壽夫人を記念す△
○我が姉上（一五）……市田夫人
○妻小壽（一九）……金森通倫
○九郎ちゃんのお家（二三）……海老名みや子
△金森小壽姉略歴（二五）……記者
○行く春の頃（二七）……野口せい子
▽少女の指導に就て△
○少女と讀物（二九）……宮田脩
○東西の少女（三二）……三谷民子
○謠ひつゝ働く生活（三五）……金子白夢
○話し方の研究（三八）……久留島武彦
△三越の兒童博覽會（四八）……みさを
○わが父の遺訓（五二）……志立たき子
△片割月（五五）……紫嵐
△夢のこと（五八）……久野恭子
○隨感（六五）
△國民に豐富なる信仰を與へよ（齋岡淺子）△身の光りは目なり（一記者）
△所謂日本調子（小此木松子）△拔萃帖（森田松榮子）△墨國より（小橋陶子）
○時事其折々（六九）……楠男
△編輯だより（七二）……編者
○聖顏の光（五）……海老名彈正

第四卷第六號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

千代田香油

（嬉しいこと）
美ちやんの赤い毛も、花ちやんの[illegible]れ毛も、芳ちやんの脱毛も頭垢も 皆美しくなりました、之れ全く千代田香油の賜と喜んで居ります

定價
金七十錢
金三十五錢
金二十五錢
金十七錢

英國製スワン石鹼日本一手發賣元
本舗 東京馬喰町四丁目 振替東京二〇五〇〇 山岸三之助 電話浪花三七九三
大阪支店‥‥大阪南區堺筋鹽町二丁目七番地

英國製
スワン浮石鹼

家庭用

○入浴用にも化粧用にも安心して使へる最も純良な石鹼
○何處の御家庭でも盛んに愛用される最も重寶な浮石鹼

千代田香油本舗 山岸三之助

僞物ありスワン鳥に御注意を希ふ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

牧羊者カード

●縦三寸二分　横二寸三分
●十种取合五十枚入壹包二十五錢郵稅二錢

全國日曜學校大會紀念

として發賣せる日曜學校用**新式カード**にして幼年科及高等科の男女生徒達の意向に適する樣彩色體裁等に充分なる注意を加へ**五十枚共各異**なりたる聖句を刷込みたる高尚優美の品なれば御注文の上續々御試用あらん事を冀ふ

東京小石川區武島町二十五

發賣元　便宜堂商店

振替貯金東京六三三〇番

特約販賣店　○東京銀座敎文館●東京尾張町警醒社書店●東京有樂町基督敎書類會社●東京神田小川町普光社○大坂北久寶寺福音社書店

便宜堂商店目錄 御入用の方へ二錢切手又往復はがきにて申越あれば進呈致候

玉

京都染元

染見本發行

黒紋附　模様染　新小紋　色染　更紗染

取引簡易

玉德商店

京都市醒ケ井佛光寺

京染

悉皆商

松井宗七

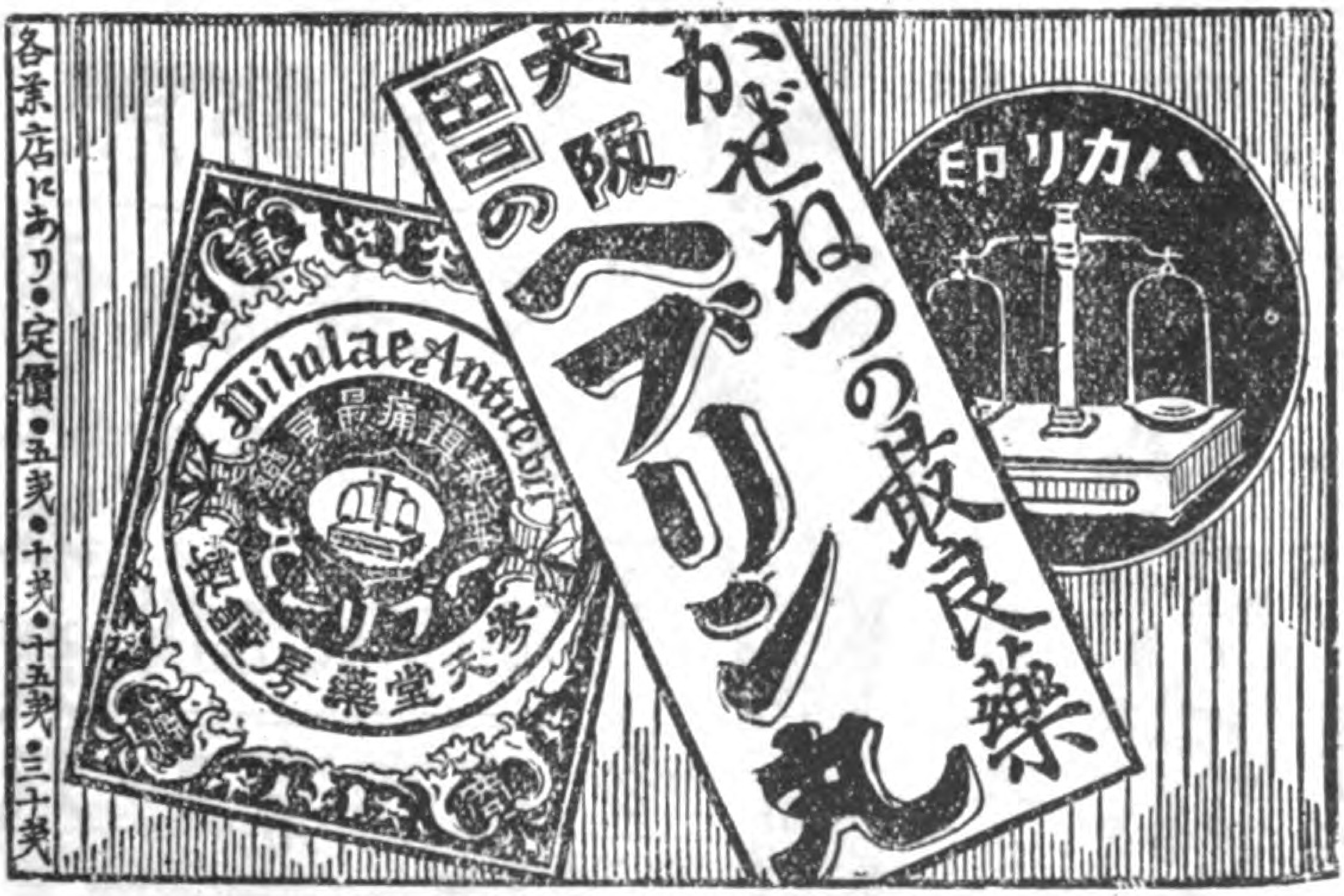
京都市新町三條上ル

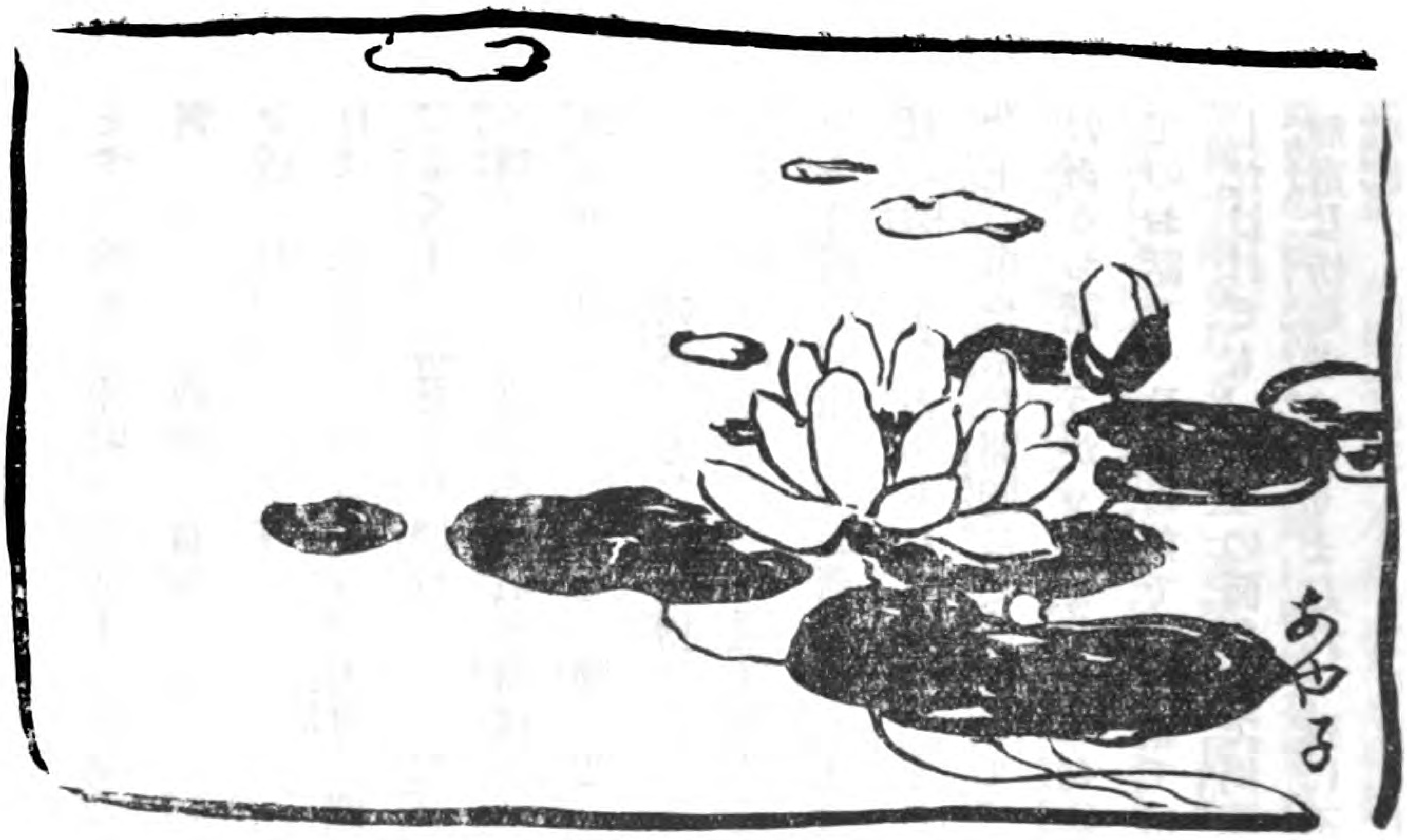
并ニ白生地販賣仕候

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「かれこれと迷ふこと勿れ
完全無缺なる大學目藥あり

大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑にして●はやり目●トラホーム●星目●のぼせ目●かすみ目●血目●疲目其他眼病一切に驚くべき奇効あり●全國各地有名の藥店にあり





明治四十五年六月一日發行　第四卷第六號

美くしい感化の實驗

安井哲子

人格は一種の力であります。正善なる人は勿論、深遠なる學識を有する人、特殊の藝術に秀でたる人などは、自品性が陶冶せられて他人に一種の力を及ぼす者であります。高德の人に接した時、博學者の話を聽いた時、或は又有名な美術家の製作品を見た時などに受くる一種の感化は即之れであります。然るに吾々の如き平凡の人間でも同情に充ちて居た時や、誠實であつた時などには、往々豫期せぬ影響を人の心に及ぼす事があります。私は常に未來の國民たるべき現時の兒童のために、吾々成人が美くしい感化を其周圍に與へて、彼等をして常に正氣と愛とに充ちたる空氣の中に生活させたいと熱望して居るのであります。加之家庭や學校の良習慣が不行儀なる社會に依つて破らるゝのを見ます時には、是

等兒童のために公衆作法の改善を望んで止まぬ者であります。然るに先頃宇都宮より歸京の途次、圖らずも實に美くしい感化の實驗を致して何とも云へぬ愉快を感じたのであります。

當日は宇都宮市にある教育の大會が開かれまして有名な某博士の講話を拜聽致しました。其學識といひ、雄辯といひ、實に聽講者を醉はしめましたので私も歸汽車の中でお話の記憶を喚び起こして居ました。ところが發車間もなく其博士は一等室から不圖私共の室に來られまして、「日頃は多忙である身故、かういふ時間を利用してお話を承りませう」と行儀よく私の隣に坐を占められました。それから種々御研究上の事や宗教問題などに就いて、殆三時間も興味のあるお話をうかゞひました。勿論是等は私に對してのお話で、公衆の前での講話では御座いませんでしたけれども、餘りの面白さで周圍の人々は次第に靜肅な傍聽者となりました。殊に不行儀に臥て居た向側の一男子などは、いつの間にか起き直つて熱心は謹聽者の一人となりました。

外の眺めを樂しむ事も出來ぬ夕方の汽車中などでは、乘客は不行儀に飮食したり、横臥したり、さては聞きにくい話などをして徒然を慰むる者でありますのに、かゝる高尙有益なお話を傍聽する事が出來ましたゝめ、吾々は時の經つのも打忘れ、如何なる驛を通過したかも注意せずに樂しく上野より程遠からぬ驛までまゐりました。此處で博士は叮嚀に會釋せられて、御自身の室に立ち歸られましたが、人々の心は尙興味に充ち靜肅に保たれて居りました。兎角する中汽車は王子に着いて、男女合して六七名の人々が新に乘り込んでまゐりました。吾々は恰も言ひ合はせでもした樣に、席を明けて「此方へ、此方へ」と是等新客を親切に迎へました。何たる美くしい光景でありましたらう。私は未だ曾てかゝる行儀の良い同情ある乘客と同車した事は御座いません。

之れに就て思ひ出しますのは、曾て經驗した英國の家庭讀書會の夏期休業利用會であります。會員は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

小學教師や、勞働者や、小商人などの類でありますが、景色の佳い涼しい土地に轉地を兼ねて、知名の學者や紳士淑女などゝ一二週間も同居して、共に語り共に食し又は共に遠足などを致しますと、自然に其心情風采に感化されて、いつの間にか男子は紳士らしく、女子は淑女らしい言行を爲す樣になるのであります。

人の心が周圍に及ぼす影響は實に驚くべき者で、獨り兒童が成人に對してのみでなく、成人相互にも亦模倣もし、感化も受けて、其性格を一變する事があるのであります。前に申した博士といひ、讀書會の紳士淑女といひ、皆最柔和で且同情の深い方々でありました。而も其心に深く貯へられたる學識と、外部に表はれたる高い氣品とは、吾々の心を不知不識謙遜にし、從順にし、且又無意識的に其感化を受けしむる力を有つて居ります。嗚呼吾々は敎師として、意識的に且具案的に毎日苦心して生徒を指導して居りますが、好果を得る事は中々困難であります、之れは必竟吾身の智德缺乏に基くので、他人を敎育せんとする前に先此缺點を補ひさへすれば、求めずして良結果を得るでありませう。

凡誠意より出づる言葉には力があり、正しい行には權威があります。然るに自深く考へもせず、又自ら信じもせぬ事を唯口に說くのみでは、決して他人の心を動かす事は出來ません。先自身の心が動いて後、初めて他人を感動させる事が出來るのであります。若しも敎育が感化の仕事でありますならば、親や吾々敎師は兒童敎育のために、先彼等を導く力を有たねばならず、そして其力を得るには修養せねばならぬ事は申すまでもありません。此力は實に吾々の生命であつて、之れによつて吾々は正しい心、優しい情を自然に有つやうになるのであります。加之他人が之れに接する時には、直に感動して其人同樣に動く事は恰も電氣に感ずる樣な有樣であります。

そこで吾々は誰でも皆聖人となつたり、博學者となつたり、或は又秀でたる藝術家となつて、他人を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

自然に感化教導し得るといふ譯にはまゐりません。心の清い人や情ある人などは、往々無學にして學者も及ばぬ所の感化を與ふる事があります。ある私の知人の如きは、教育の程度も低く富も位もない一老婦人でありますけれども、非常に深い信仰あるがために、自然に威嚴と氣品とが出來、言はず語らずして人々の心を慰め且又謙遜ならしめる力を有つて居ります。若之れが學識ある人でありましたならば、感化の及ぶ範圍も亦大に廣がる筈であります。吾々は教師として其兒童のために、一層自身を修養せんと努めて居りますけれども、之れと同時に社會の全部が清く正しくなつて、是等小國民をして到る所に善良なる感化を受けしめたいと切望するのであります。其故に前申した汽車中の博士や、英國讀書會の紳士淑女の如くに、無意識的の良影響を周圍に及ぼす方々が次第に增加して、汽車中といはず、電車中といはず、總て公衆の集る場處の空氣を淸めて、此處に來る人々に快感を與ふる事が出來ましたならば獨り兒童のためのみならず、吾々成人の疲れたる心にも亦よき慰藉を與ふる事が出來ませう。

うめくさ

△久しく外國にあつた一人の兄は、或日その弟と散歩に出ました。暫らく歩みますとその兄なる人は突然弟に向ひ、あなたは○○君と始終散歩したか」と尋ねましたので、弟はびつくりして「兄さんよく御存知ですね」と云ふた。兄なる人は「あなたの歩き付きがまるで○○君と同じ様になつたから」と申したさうであります。

△これは外國での話で、一笑話に過ぎぬ樣にも思へます。然し我々は呼吸する如く、常に周圍から何等かの感化を受け、また與へつゝあるので、目には見えずして、しかもその結果はいつも豫想外に大なるものであります。而して最も完全なる人格を備へ給ふ基督に、我れ等の精神が交る時、必ず我れ等の品性は揭げらるゝのであります。（三四子）

聖顔の光

海老名彈正

光に命じて暗より照り出でしめたる神我等をして耶蘇基督の面にある神の榮光を知るの光を顯はさしめん爲に我等の心を照らし給へり。「哥林多後書四の六」

△人格の光に撃たれたる實驗

使徒パウロがダマスコ市附近に於て一の驚くべき實驗をしたと云ふ事は、恰も全く電光に撃たれた如き感想であつたと思はれる。その天外の光は彼の身邊を包圍し更に心の中迄も照し込んだ心地であつたらう。かゝる實驗は決して珍らしからぬもので、間々熱烈な宗教實驗の中に於て表はれるものである。かのルーテルに就ても、一日彼が學校へ行くに突然雷鳴に出會して、彼が同伴の友達が之に打ち倒された、その時彼は驚きと怖れとの刹那忽焉として大悟する處あり、そのまゝ寺院に入つたと云ふ傳説がある。しかし乍らこれは雷電そのものにあらずして、全くルーテルの精神上の出來事で、唯彼が雷電に出會はせた樣な實驗をなして、その時神の御聲に呼び起された良心の聲を聞いたのである。かくの如く不圖自分の中に盛な光が照入し來て今迄の闇黒方面が忽ち照し破られ、精神が遽に明になつたと云ふ實驗は決して珍らしいものではない。しかしてその時光が一時的に輝いて直ぐに亦消えてしまふものならば、尊い事は尊いだらうが、一刹那の閃きに外ならぬ、さして有難きものでもあるまい。されどルーテ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ルの場合などもその光は瞬間に消えたのでは無く、永く永く彼を照したのである。その光は抑如何なる光であるか。パウロが自らの實驗を書き殘したのを見るに、その光は普通の光の如くではなくて、一種威嚴ある人格が彼の前に輝いてゐると感じたので、覺えず爾は誰ぞと尋ねた。果して答へがあつて、我は爾が窘迫る處のナザレのイエス也と云のであつた誠に彼の光と云ふは人格の光である。單なる光を云ふものではない。ルーテルのかの實驗もそのまゝでは明に知る事ができないが、後日自ら語る處によれば、同様に基督の人格に依れる光が絶えずその中を照して居つたことが分る。パウロは之を稱して基督の顔に輝ける神の榮光の光也と云ふ。この光が人の心の中を常に照して導いてゐると云ふ事は昔から基督信徒の深く實驗し來つた處である。基督も自ら我は世の光也、我を信ずる者は暗き中を歩まず、生命の光を得るといひ給ふた。これ取りも直さず人格の光の意である。

△人の光は顔に存す

人の身體に取りて最肝要なるはその顔面である。故に人の光はその顔に存して居ると思ふ。古に於てもこの盛な顔の輝きはモーセのシナイ山より降つた時にあつたと言ひ傳ふ。モーセは山上に於て永く神と相交つた結果、その顔が美はしい光を發する樣になり、かれが下山した時の如きは、イスラエル民族は眩しくして之を仰ぐ事を得なかつた、故にその面に蔽をかけて始めて相語る事が出來たと云ふ面白い意味ある傳説である。又ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人の弟子がイエスの伴をして高き山に登つた際、イエスの顔が輝いて日の如く成つたと云ひ傳ふ。これらは勿論比喩に相違なけれど、人格の光に譬へたものである。抑耶蘇基督の人格の輝きは如何なものであるか。又かれを信ずるもの、この光に接して如何なる實驗をなしつゝあるかが、最も考究する價値ある事であらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

△基督の人格に現はれし神

吾等基督教徒が直接に神を見ると云ふ事は、とりも直さず基督を見ると云ふ事に歸する。元より天地萬有の主宰なる神は萬有に徹しても窺ひ見る事が出來やう。例へば白雲の迷ふ深山の頂に於て、迷想をこらす時は神靈の氣が座ろに身に迫る事を覺える。然れどもこれは普く自然崇拜家の學び得る處にして何ぞクリスチヤンのみの實驗に限らうか。或は又精神の最深い處に於て靜かに神に對する事も出來やうが、これも見性成佛を努むる人と何の撰ぶ處があらう。けれども吾等がこれらの人々と類を異にして居るは、我々はこの人類歷史上に於てイエスクリストを有する事である。これに依て自然崇拜家や見性成佛を務むる者よりは殊に明に尊く神に觸れる事が出來る。基督の人格に依つて神を見る事が出來るのである。

△基督の人格とは如何

さらば基督の人格乃至その姿は如何と云ふに、吾等未だそれを想像する事は出來ない。聖書にも敍べて無い。唯古來有名な畫工や彫刻家が思を凝らして傳へてゐるものがある。それは大美術家がその心に會得した處を現はしたもので、元より立派な崇嚴なものであるが、決して充分也と滿足する事は出來ない。我等が聖顏の光と云ふは、決して容貌そのものではない、その人格でなければならぬ。基督の人格は吾等基督を信ずる者の前に一種云ふべからざる尊嚴を以て顯はれて來る。四福音書にて色々學ぶ處は誠に善き傳へである。がその各般の事實の眞僞に就ては古來許多の神學者の間に論爭が絶えない。又基督の傳記としては事實が極めて乏しく豐富でない事を恨むけれ共基督教徒の求むる者は傳記その者では無い、吾等の信仰の根據は決して基督の言葉や行動ではない、實にその言行の本源である人格に存する

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

勿論吾々はその敎訓を重んずる、又その行を以て吾等が行爲の規範として尊ぶ。けれども吾等の仰ぐ所は言行の範圍に限らるゝものではない、之を超越する人格である。又言行は基督を知る上に就いて重要なものであるが、然し言行の材料が多いからといつて、基督の人格が分るものではない、吾々は一片の言の葉により、一點の行ひ振りによつて、その主人公の人格を窺ひ知ることが出來る。吾等人と人との交りに於て互に逸事を多く知つて居る者が、必ずしも親友ではない、竹馬の時から交はり續けて居る者が知己ではない。反つて一見して舊知己となることもある。言と言と度々相觸るゝまでもなく、行と行と折々相接するでもない、一見直に人格と人格とが中心まで相契合する事が出來る。之を眞の知己眞の朋友といふ。此の如き事は往々にしてある。吾等が基督を知ることもかくの如し。たとへナザレの村に於ける幼き時よりの言行を熟知してゐても、彼を知るには殆んど何等の効もなさぬことである。反つて僅かなりとも四福音書に現はれた事に依り、あざやかに基督の人格を發見し、それに觸れる事が出來る此の如くして始めて眞のクリスチャンたることが出來る。例へば、心の淸き者は福也と云ふ。一句でも、そこにその主人公の如何に尊いかを示すのである。偉人の言は多大の價値を有する、之れ人その人格の閃めきに外ならぬ。この閃めきによつて、或は又そことに尊き人格の眞體を仰ぐことが出來る。身の光は目也、若汝の目瞭かならば、全身も亦明かなるべく、若し爾の目眊からは、全身暗かるべし。是故に爾の中の光もし暗からば、其暗き事如何に大ならずや。人は二人の主に事ふる能はず、蓋之を惡み彼を愛しみ、此を親しみ彼を疎むべければ也、なんぢら神と財とに兼事なる事能はずといつて、正心誠意を要求し給ふ基督の至誠に接する時、いかにその威嚴に打たるゝであらう。この人格に對する時は己れが心の中の暗いこと汚れあることはその嚴なる光に照されて、如何に罪人なるかを感ぜずには居られな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

い。我が眞面目を打ち開いて僅々一句又は二句に觸れてもかくの如くならば、況んや四福音書の始めより終りまでを讀み了りたるとき、彼が威儼の光は燿く々として朝日の如く己れが胸奥を照らさないのであらうか。

△權威ある聖顏の光

その聖顏の光の前には吾は襟を正うし頭を垂れて崇嚴の態度を取らざるを得ない。こは何故ぞ、そこに吾々を壓する偉大の權能はないか。その權能は抑如何なる性格を有するものであるか。それは潔い正しい强い人格の力であつて、吾等の心底を照し破るからではあるまいか。この力に感じ、この光に打たるる時、吾等は始めて神に觸れ奉ることが出來る。吾等高山の項、森林の間心靜に迷想する時、唯寂然たる感、肅然たる想を起すのみ、そこに潔い、正しい、强い、難有い、慕はしき感想は發して來らない、或は大海のほとり、悠々たる雲の形、飄々たる風の音などに心を奪はるる時、宇宙の壯大なる靈氣には觸るゝであらうが、その時果して神聖にして犯すべからざる道義の權威に觸ることが出來やうか。道義的の力は基督の人格に觸るゝ時ばかり、したゝかに我を壓する。その時は無限の權威が巍然として、吾前を遮り、我をして肅然襟を正うし畏敬の態度を取らしむる。是れ人格の光に擊たれたるときの心情である。基督の顏の光は神聖にして犯すべからざる威嚴の光である。吾等が事に臨んで躊躇し、斷乎たる處決を肯じ得ざるとき、その命を得んとするものは之を失ひ、その命を損つる者は之を得んと、英斷猛進を要求する人格の權威は果して如何。之に由つて見れば、ダマスコの門前この光に擊たれてパウロが仆れたことあるのは彼が內的實驗の表式たるは疑はれない。ルーテルの見たる怖るべき電光もこの消息を語るに外ならない。

△恩愛溢るゝ聖顏の光

不可思議なるかな。威嚴を以て吾等を壓し仆す聖顔の光は、同時に亦吾等を仆れより呼び起す不思議の力を有する。この力は吾々が頑固なる心を溶かし殆んど反抗の力を失はしむる恩愛の光である。これ基督を信ずる者の一面の實驗にして、彼の言行を通うじて輝き來る人格の恩賜である。例へば社會より棄てられたる税吏、罪人の間に交り、健全なる者は醫者の救を求めず、唯病あるもの之を求む、我來るは義人を招く爲めに非ず、罪人を悔ひ改めさせんが爲なりと云つて、少しも小人との交際を汚はしとし給はなかつた處、如何に弱者に同情ある人格であつたかは、その聖顔に照り輝く光の長閑さにて知られる。誠に弱者を勵まし、仆れたる者を呼び起し、病める者を活かす光である。憐憫ある者は福也と云ひ悲しめる者は福也と云ひ、又人の子は亡びたる者を救はん爲に來れりとのたまふが如き、明に之を證明する者ではあるまいか。或は牧者が九十九の羊を野に置きて迷へる一匹の羊を探し求むる比喩の如き、或は有名なる放蕩息子の比喩の如き、誠に熱誠の情こもる比喩である、唯單に比喩として見れば、その深い情味は分らない。しかれどもその比喩は如何なる人格より出でしかを思ふときは無限の價値を加ふる。人間の弱きを救はん爲に來れる人格、人間の堪へ難き苦惱を自ら負ふて、之を救はんとする至誠至愛の人格のものせる比喩たる事を思ふ時は、恩愛限りなき聖顔の光は死せる者を復活せしむる力たるを體得する事が出來る。

△光彩豐かなる聖顔

この光は樣々の色彩を有して居る、決して單純なる者ではない。顔も擧げ得ぬ許り威嚴赫々として凡ての罪惡を燒き盡さんとする烈火の如き色彩もある前に云ふ如き暖かなるやさしき惠の色彩もある。山上の垂訓に於て色々の複雜なる惠恩の光を見る事が出來る。貧しき者を福ならしむる光あり、哀しむ者を福ならしむる光あり、柔和なる者を福ならしめ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

義を慕ふ者を福ならしめ、矜恤ある者、心の清き者和平を求むる者、正しき事の爲に責めらるる者を一々福ならしむる光の色がある。この處丈にも十種の色彩がある。かくの如く種々性質を異にする者を福ならしむる光が基督の聖顏に輝いて居る。パウロは之を見て畏み懼れた、又之に由つて欣喜雀躍した。又ヨハネは父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理とに滿てりと云つた。又ルーテルは基督を信ずる事と神を信ずる事とは同一にして、そこに區別はないといつて居る。

世間には往々神は信ずる事が出來るが、基督は信ずる氣にならぬと云ふ者もある。又基督はよくわかつてゐるが神の事は一向承知が出來ないと云ふ者もある。共に淺薄の譏を免れない。吾等が天の神に交ると云ふことが自然世界の鳥や花などを通して觸れたのならば、基督を省く事も出來るであらうが、それは決して眞の尊い基督の神に交つて居るのではない。吾等は基督に依らずしては無限の獻身的精神を獻げて交る事の出來る眞の神に接する事は出來ない又基督を度外視して神を論ずる者は未だ眞の境涯に入れる者ではない、假令その人が神よと呼び、父よと叫ぶとも、そは妄言に非ずんば、鸚鵡の人眞似の類のみ。眞に意義ある神は吾等基督に接して、始めて了解せらるゝ。基督の威嚴ある人格は覺えず吾等をしてその前に平身低頭せしむる、基督の恩愛深き精神は吾等をして歸するが如くその前に一切の憂と悲しみとを携へ至つて慰めを求めしむる。茲に於てこそ眞に力ある愛ある神に吾等接する事が出來る。神は愛也と云ふ深い實驗は必ずや此の境を通過したものでなければ得られない。この一大默示は基督を離れて現はれ來るものである。吾等が親しく基督に接して、その聖顏の光を仰ぎつゝある時は、即ち吾等が神を見つゝある時である。かくの如くルーテルは神と基督とを二つとしなかつた。實際彼が基督を見つゝある時は即ち神を仰いで居る時であつた。これは誠にルーテルの深い經驗を表はしたものである

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

約翰傳に我を見し者は我父を見たりと書かれてあるが、即ちこれと同一の實驗を示したものである。

△榮光ある交際

吾等は高遠な論議を弄んで、基督が神であるか人であるかを證明しない。唯一つ明確に論斷し得る事は深い宗教的實驗に於て、基督の人格に觸るゝは、同時に神に觸るゝといふ事である。即ちその神とは基督の人格に輝ける神にして始終吾等が基督を通して觸れつゝある。神である吾等が茲に神と仰ぐは哲學者の好んで考ふる無限と云ふ意味でもなければ、又絶對と云ふ意味の者でもない。吾等の神は基督に顯はれて吾等の弱き心を慰め、強き心を勵まし、常に吾等に同情あり交渉ある神である。哲學者の認むる神には吾等と何の宗教的交渉があるか。抑も吾等が無限にあこがるゝとは何事ぞ。絶對に觸るゝとは何事ぞ。人生の悲慘を此の闇黑なる絶對が慰め得るや、罪を征服して人格を練磨する事をこの冷灰の如き無限が勵まし得るや。吾等の衷なる深き義しき心を呼び起し得るものは吾等の心に同情ある暖き基督耶蘇の力ではないか、誠に聖顏の光ばかり尊き者はない。恰も太陽が弱れる日蔭の草に力と色とを與ふる如く、聖顏の光は衰へたる吾等を照して、吾等に命を得させる光である。

誠に朝に夕に吾等を環り照して命を與へんとしつゝあるは聖顏の光である。尊い基督の人格の光である。云ふ勿れ彼は千九百年前の人也と。人格は既に時間と空間とを超越して居るものである。我等の信仰も時間と空間とを超越して、常に心と心と、靈と靈と相觸れ相接して基督を眼前に認めて居る否吾等の衷なる深き義しき心を喚び起して基督に同化し、パウロの云へる如く最早吾れ生けるに非ず、基督吾中にありて生くる也と云を憚らぬ。此の基督の聖顏に輝ける光に照されて、常に神の靈顏を仰ぎ、その恩愛と靈の力とを味ひ、榮光より榮光に進み、終に神の榮光に全く同化するを得る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

誌友金森小壽夫人を記念す

嗚呼金森小壽夫人

聖山生

人生何物か死に勝る痛恨事があらう。上は王候貴人より、下は茅屋の裡に細き煙を立つる下民に至るまで、死は等しく痛恨事である。七十八十の高齢を享け得し老人にも、楓のやうな手もて縋る二歳三歳の兒童にも、死は等しく痛恨事である。されど如何に考へても、如何に思ふても四十五十の分別盛りで家庭のためにも、社會公共のためにも、なくてならぬ人の死ばかり、惜しくも亦痛ましきものはない。

金森夫人小壽女史は恰も其一人である。彼れは去四月四日ふとしたことより枕につかれ、中途、輕快の由聞き及びしが、去十一日午前十一時溘焉として永逝せられた。余は十二日の新聞に之れを見て、實に未だ曾て經驗せざる悲しみを持つたのである。余は親戚でも友人でもない眞の他人に、斯くまで切なる悲しみを持つた事はない。嗚呼如何なれば斯くばかり余が心を動かせしや。

夫人は二十五歳を頭に、九人の子女をお持ちになつて、良人通倫氏は年が年中、殆んど各地に出張せられ、常に留守勝ちにて、家政經濟、子女の教育、一切一人にて切り回はさるゝ上に、一週四時間女子高等師範及び、東京音樂學校に倫理の教授を受持たれた。享年四十九歳、家庭に於ては云はずもあれ、

社會の人としても今にして女史の逝かるゝは、實に償ふこと能はざる一大缺罅なのである。余が初めて夫人に見えしは極めて新しきことで、實に本誌に從事するに至つてからのことである。昨年十二月或雪の日の夕初めて夫人を訪ふべく千駄谷の御宅を訪れた。余は元來交際にうとく、殊に婦人を訪問して記事を取ることなどは尤も拙なる處である。然るに夫人は快く余を引見せられ「中學高女時代の子女教育」に就て經驗と智識とに富む談話を承はつたのであつた。話中余は其子女に對する注意の周到にして愛情の濃かに、然も常に聰明なる理智を失はず、寛嚴よろしきを得たる敎養に、心中深く感服し、衷情より尊敬の念を禁ずる能はず、斯る人を母として持つ人の幸福を想像して、云ひ知れぬ深き印象をうけたのであつた。其時の話は一月號の家庭欄に海老名夫人の名の下に載つてあるが、次に訪ねた時「大變よく出來た。あれなれば拜見しないでもよろしい」とおほめに與つたのであつた。其後は「某夫人」の名の下に有益な談話を下さつたのであつたが、之に就て面白い事は、余が「某夫人」では張合がないから、どうかお名前を發表させて下さいと願つたことである。夫人は、徹頭徹尾、謙遜な態度で「私共が名前を出して人樣の前に、お談し申すのは恐れ多い事である。某夫人としてあつて、夫れをおよみになつて、多少でも御

故金森小壽夫人

參考になれば幸福です。どうぞこれ丈けはお許を願いたい」と一向聞入れられなかつたので、已むを得ず、「某夫人」で通したのであつた。『高等女學校時代の少女に就て』(四卷第一號)『如何にして子女に家政を教ゆべきか』(同第二號)『一風違つた私の主義』(同第四號)等は、即ち夫人の談話の筆錄である。嗚呼、余は最早あの閑靜な千駄ヶ谷の應接間に於て、夫人の溫き心よりわき出づる、深き美はしき經驗の聲を讀者に紹介することは出來ない。讀者諸姉はどうか、再び以上の諸文を繰返して、某夫人の名に隱れたる金森夫人の面影を偲んで頂きたい。

猶ほ余は去十六日、金森氏の邸を訪ひ、故人の神戸女學院時代よりの無二の心友なる、神戸の市田夫人に就て、故人の學院時代を聞き、又良人通倫氏に就て親しく其妻とし、母としての故人を聞くの機を得た。斯くてこそと、思ひ當る節が多く、益々敬慕の念を深くしたので、獨り胸に秘めおくにしのびずお許を得て、左に其の梗概を紹介する。讀者諸姉が心して讀まれんことを希望する次第である。

あゝ、されど、庭前の梧桐一葉、秋風にさそはれて地に落つるも、決して無意味でない。そこに何等かの大自然の深意がある。況して斯くも大なる人生の事實が、どうして唯無意味であらうか、無意味で終らうか。あゝ堪へられぬ高き犧牲なれども、必ずそこには大なる神の聖意があることであらう。滿腔の誠意を以て、弔意を表し、謹んで御一家の上に神の祐護を祈る。(五月十八日夜記)

或母親が其息子に對して、「常に誰さんはエライ、誰さんはエライ」と其息子の友人を激賞たした。ソコで其息子は其學友に就て、何故に左程感服すべきかと思ひ、其の友性行を探つて見た。然るに母の言葉とは全く相違した、交るべからざる友であつた。家庭にばかり引込んでゐる者が、唯だ人の噂などで、「何某を手本にもよ」などと云ふことは愼まねばならぬとは、故金森夫人の話。

(せい)

我が姉上

市田夫人談

私が故人と相知りましたのは、明治十二年で、私が十三歳の時でありました。故人は三歳上でありますから、十六でありました。私は九歳の時から神戸女學院の寄宿舍に入れられてをつたのでしたが、故人は其年岡山からお出でになりまして、私と同じ級創立して幾年もたゝない時でしたから其の時の最上級に入學せられたのでありました。私は交際の初めの頃を、昨日も考へて、どうして私如きものを、あんなに可愛がつて下さつたか、何故私一人がこんな親しい間柄になつたかと熟々思ふのでありますが、考へれば考ふる程不思議でなりません。故人は入學の當時既に、數學は代數などもおやりになり、又漢籍も文章軌範などをやつてゐらつしやいましたが、英語は全くおやりにならないので、エ、ビー、シーもお心得にならなかつたと記憶して居ます。夫れが三年級にはいつたのですから、お骨折は一通りや二通りではありませんでした。凡てを犧牲にして一心不亂に英語を勉强されましたが、御卒業の時は、最優等の成績で御座いました。私は一人娘で、家では我儘氣隨にふるまい、寄宿舍に入りましてからも、一番幼いものですから、先生を初め、皆が可愛がつて下さるので、いゝ氣になつて、夫れは〳〵ウカウカと暮したものであります。

斯樣な譯でありましたから、故人に對しても隨分我儘を云つたり、したりしたものですが、此人に逢いましてから深く私の心を動かしました事は「エライ人だなア」と云ふ一事でありました。其の分秒の時間も惜しんで、勉强をして居られる處を見ると、

如何に呑氣な私も、何とか感せざるを得ませんでした。「エライ人だなア」此の感想が私を引付けたのでありませう。私は舍監の室に預けられて居ましたが暇さへあれば其室に參りまして、何くれと注意を受けました。故人が入學以來、同級生の風が一變しまして、皆勉强家になりましたが、さて同級の人は故人を如何に評して居るかと云へば、ツンとした人、打とけぬ人、嚴格な人、意志の人、冷やかな人と云ふ風でありましたが、私にはこれは一つも當りませんでした。私は情深い、愛情の細やかな人と深く信じてゐました。之れはつまり私が無邪氣に、一心から敬慕して居りましたので、先方でも愛が加はつて來たものと見えます。いえ、私が餘りに呑氣に、ウカ〳〵と暮すのを可愛想に思つて、心にかけて下すつたのかも知れません。外の人達が代數など習いに行けば、何も云はずにスグ敎へてくれましましたが私が參りますと、一應其問題を見て「之れが貴方に出來ぬことはありません。やつて御覽なさい、考へたらキット出來ます」と云はれる。ソコで、ジット考へて見れば成程出來る。「出來ました」と差出すと「夫れ御覽なさい、貴方はもう初めから出來ないとおキメなさるからいけない、一應も二應も考へて出來ぬ時、敎へて頂戴とは云ふものです」と、云はれるのでした。年は三歲こそ違いましたが其の當時私の考へでは確かに十歲位は違ふ樣に思ひまして、肉親の姉か母の樣に、精神の眞底から全く推服して、何でもかでも持つて行つて訴へたり、こぼしたり、おこつたり泣いたりしましたが、實に靜かなもので私の申します凡てを聞いてから、それはかやうかやう、これは斯々と、かむでくゝめる樣に申されました、或時など、私と故人と、渡邊常子さんと、三人とも親が信者でなかつたものですから、其爲め之から祈らうと約束しまして、毎日三人で集つて祈つて居りましたが、其中皆の注意を引くことゝなり、あの人達は三人で組んでお稽古をするの何のと、色々惡評を致しますので、私が餘りいま〳〵しいから、

こう云ふわけだと辯解してやらうと申しますと、『云ふ人には云はせておけ、神樣はチャンと見てゐらつやる」と、例の調子で申されたので、何も云はず其まゝ繼續したことがありました。

故人は在學中から敎師の命により下級の生徒に敎へて居りました、が私は前申した樣な風ですから、自分と同年輩の下級生にもお友達が多かつたので、いろ〳〵先生としての評判も聞きましたが、一人として愛慕してゐないものはありませんでした。ソコで愈々卒業となりまする前、或日私達はもうお別れになるかもしれませんから、今日はシンミリとお話しませうと、お互の將來の事など語り合ひました。私が、「貴女は生涯を敎育の事業に捧げなさつては如何？」、私あなたの性格から、其敎へぶり、又生徒達の貴女を敬慕してゐるさまを見まして、貴女はそれが使命ではないかと思ひますよ」。と申しました。スルト、我が意を得たりと云ひ顏に、「貴女にもそう見えて！、私は自分にも其使命があるかのやうに思れてならないの」、と語り合ふたのでありましたが、私は卒業して家庭に歸る、故人は先輩たちのすゝめもあつたので、止まりて神戸女學院の敎師となることとなりました。

これは二年間程で、夫れから歸鄕して、山陽女學校を創立せられたのでありましたが、此二年間の私共の間の交情は益々深きを加へ、私は相變らず、いろ〳〵面倒をかけました。お恥しい事ですが或時など、私が久しく寄宿舍生活をいたした結果、どうも家の人達と調子が合はぬのでソット家を出で、實に辛いと、訴いて行つた事がありました。スルト懇々と敎訓せられて、私を慰め歸し、後で一月の聖書日課表を作り、私にとりて適切な聖句を撰びて夫れに書き取り、其の傍らに彼れの熱誠に溢れた懇切な訓戒を書き添へ、毎日〳〵これを見るやうにと申し越されました。夫れは〳〵實に綿密なものでありまして、之れによつて私も深く自らの足らざるを覺り、日々拜誦して心の鏡としたのでありましたが、足ら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ぬながらにも、私が今日こうして居ることの出來ますのは、全然故人のおかげであります。其後は私の方は別に變りはありませんが、當家では諸所方々に處をかへられ、境遇の上にもいろ／＼變化がありますし、又近年は斯く東西に分れてゐましたので、お話しする程の事ありませんが、昔に變らぬ友情は距離の遠近にも拘はりませず、常にお忙しい中から、親切な手紙を下いまして、私を導かれたのでした。尤も十數年前に此方の四女を私の方に頂きまして以來は、親戚の關係となりましたが、その事がなかつたにせよ、私にとりては肉親の姉以上の姉君でありました。

妻小壽

金森通倫氏談

妻は何事によらず、仕事と云ふものに高下優劣をつけなかつた。如何なる事も、夫れは天の命じた所のもので、決して之れは大切な仕事、あれは下らぬ仕事と云ふ風に思はず、與へられた仕事を、「一生懸命」、最善を盡してやつた。「現在に忠實にする」と云ふ事は妻の處世觀、人生觀であつた。例令ば家にあれば室の掃除から、臺所の掃除まで自分で一生懸命にやる。其樣子を傍から見てをると、熱心に、左も面白そうに、夫から夫れとやつて行く。一心不亂に全く掃除と云ふ事に精神と精力とを集注してをつた其中に自分の使命があると感じ、最も完全に夫れを仕上げるのが、重大なる義務で、且つ非常に愉快な事の樣に見へた。否自身にも子供などに左樣云つてをつた。ところが一週三回づゝ、お茶の水に（女子高等師範）倫理を敎へに行く。之れを非常な樂しみとしてをつた。どう云ふ事柄を敎へたかは知らぬが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

兎に角一生懸命に意を盡し、精神を盡してやつた事は間違はない。彼れの頭にはお茶の水で生徒の前に講義をするのも、宅の臺所の掃除をするのとは、其間仕事として寸毫の差はない。何れも我が使命と感じて忠實に熱心にやつた、どんな仕事でも賤しいと云ふこともなければ、尊いと云ふこともない。凡て同じである、とは常に云ふところであつた。

お茶の水でどんな事を敎へてをつたか、筆記してる生徒でもあれば、手に入れたいと思つてをるが、生徒などから來る書簡を見れば、略ぼ見當がつく。私は今猿猴を友とすべき山國に、小學兒童を相手にしてるが、先生の御敎訓を思ふて、滿足して、樂しく天職に從事してをるとか、都の友を思へばたへられぬ事もあるが、先生の御敎訓で自分の非を悟り、感謝して職務に從ふてをるとか、此んな類のものが多い。妻の「職業其ものに貴賤はない現在に忠實なれとの敎訓が、彼等を慰め勵まして居る所がありありと表はれてをる。妻のこの主義主張は誠に著しいものであつた。

從て妻の最も顯著なる性格は、如何なる境遇、如何なる地位に置かれても決して一言半句の不平不滿を云はなかつた事である、結婚してから恰度二十五年、今年が銀婚式であつたが、二十五年の間、唯の一度も不平がましき事、不滿を帶びた聲を發した事を聽かなかつた。恐らく子供等にもそうであらう。私もこれには眞に感服し、卑しい我心を省みて、心中忸怩たる事は幾度あつたかわからない。御承知の通り私は實に轉々として境遇の變つた身で、其間には貧苦患難、毀譽褒貶、非難攻擊、夫れはもう實に有ゆる苦勞をして來たのであるが、妻は斯る時、私に向つて唯一言もつまらないとか、こんな事ではとか、身の不幸、不遇を訴へた事は更になかつた。平氣で微笑して、其日〳〵を感謝の念にみちて送りました私は至つて境遇に對する不平不滿の多いもので、何時でも社會に對し、人に對して又自分に對して不平不滿を抱き、時々自から夫れが洩れると、何もかも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

教訓ではありませんかと、私を勵ますので、之は今日初めて申しますが我妻ながら、深く敬服して、私は心の中で「どうしてお前はそう云ふ立派な心掛をもつ事を得たか」と思ひ、妻の前には不平も不滿も何時とはなしに散じて、感謝の念と變つたのである斯う云ふ風であつたから、妻は他人の地位や名聲を口にした事なく、況して他人を批評し、何のかのと婦人持前の人物評などは決して口にしなかつた。たとへ害にならぬことでも他人の批評をすると云ふことは堅く禁じて、子供等の前などでは何事によらず人を評することは大禁物としてをつた。修養の積んだ男子でさへ、中々逆境不遇に對しては不平不滿の念は禁じられないものだが、況して感情で活きて居る婦人が、貧苦を喞ち逆境を歎くは世の常である。然るに彼は全く之れがなかつた。妻が尤も興味をもつた事は教育事業であつたが、結婚後數年若しくは十數年と云ふものは、全く貧乏なおかみさんとして毎日米櫃の心配と、子女の養育とに、燻つて居つたが、此時も彼は一言の不平をこぼした事を聞かなかつた、而して熱心に忠實に、彼女の主義を實行して倦む事を知らなかつた。私は一日として心から妻を尊敬しない日はなかつた。妻は實に私の鏡であつた。

私の子女は全然母崇拜である。彼逝いて一週間になるが、總領の二十五歳になる息から、末子の六歳になる息まで、九人のものが、母を失ひ切らずに居る。他人の手前は、あの通り賑かにして居るが、歸つた後では、皆夫れ夫れに、何とも云へぬ深刻な思を以て、沈默するのである。實に斷腸である。彼等は母を何うしても失ひ切らぬ。彼女が此儘に死んで仕舞つては、彼等も精神的に死ぬ。彼等は母を自分等と共に活かさねばもう堪へられない。其ため彼等は悶へてをる。實に私の身になれば斷腸の極であります。靈魂不滅、理屈も學説も一切を放擲して、母の靈は、其精神は、我等の中に活きてをる、自分等と共に永遠に生活する。此の深甚な要求が、彼等の裏に迸つて居るのである。昨日も兒共が末の兒をつ

れて、三越の兒童博覽會に行つたが、「母は日本橋にも居るね、お家にも居るね、何處へでも居るんだね」と云つて皆を泣かせた。兄姉共が教えたのであらうが、眞に斯く信じ切つてをるのである。

妻は九人の子をあげたが、前にも陳ぶる通り、彼女は彼れの愛と智識と精神との最善を盡して、一心不亂に子女の教育に從事したから、九人の子供が、未だ曾つて一回も大病にかゝつた事なく、眞に健康に生ひ立つて、今日までの所では學業も皆まづ優等で通して來てをる。大抵ならば、九人も子供を產めば、其中には病弱なものもあれば、甚だ困つた者も出來るのが、マア普通である。元より弱そうな子もないではなかつたし、私の子供だから教育を怠つたならば、どんな人間が出來るか分らなかつたらう。然るに其體質に於ても、其精神に於てもまづ今日あるを得るのは、全く彼女の賜物である。されば子供等は、母を神の如く思つて、絕對に服從し、尊敬してをつた。私もお母さんはお前達の鏡だ、お前達はお母樣の前に出て、よい事も惡い事も、有のまゝに寫して、お母樣の教訓をうけねばならぬと申してをつた。總領の子が、仙臺の高等學校時代、三年間每日〳〵其日〳〵の日誌を書いて、月に數回づゝ送つて來たが、家では夕食後打揃ふて、夫れを讀むのであつた。或は今日は甘く出來たとか、出來なかつたとか、何處に行つたとか御馳走が甘かつたとか。全く有の儘である。夫れで、私はお前達が生涯お母樣の前に出す事の出來る日記を書く間は、お前達は立派な人間だぞ、と訓めたのであつた。彼等は自分のした事、思ふた事を歸つて、來て母に話すことが無上の樂しみで、母は彼等の生命の凡てを支配してをつたのである。で今日遇然にもこんな事となつたのであるから、彼等の悲しみは、實に痛切なもので、殆んどたへられない。母が亡くなるのは我が生命がなくなるのである。だから、斷じて母はなくならない。肉體は死しても精神は我等を守り、我等を教へ、我等と共にあると信じ切つて居る。（談話梗概）

九郎ちやんのお家

海老名やみ子

若葉露けき今日此頃、九郎ちやんのお宅は實にお淋しうございます。九郎ちやんのお母様は、可愛い九郎ちやんや其お姉ちやんの鈴江ちやんや又其姉さまの鈴ちやんや其他澤山のお姉さまや兄さまを殘して、其上に其お父様をも殘して逝つてお仕舞なさいました。家中に春の太陽の樣な、うらやかな光を與へて下すつた母樣のお姿はもう見ることが出來ませぬ。母樣のお部屋は奇麗に片付けられて、生けるが如きお寫眞が飾られてあります。其前に造花や御友人方からの熱い涙のお手紙が山とつまれてありますお寫眞の眞ん前に、とり立てのイチゴが小さな、奇麗な器物にもられて供へてあります。これは何方がお供物のときゝますと、それは九郎ちやんが母樣のお好きないちごを裏のお畑からとつて來て母樣におあげになつたのださうです。其側には小さなお人形が飾つてあります。言はずと知れた鈴江ちやんのお供へでしやう。大きい方〱は其全靈全身を母樣に供へて亡き母君を祭つて居られます。アヽこの樣な心がらなる供物こそ眞に生れる供物といふのでしやう。

　九郎ちやん等は母樣が天國へ行つてお仕舞なすつたといふことは、どうしても承知が出來ませぬ。誰か慰める積りで、母樣は天國といふ大變よい處へ、入らつしやつて、神樣と共に喜んでおいでになるのだと申されましたら、母樣は獨りでそんな處へ行つて仕舞つちやいやだといつて九郎ちやんは泣き出しました。いゝ遠くへおいでになつたのではない、母樣は神樣と御一所に此お部屋にも、お座敷にも、何

處にでも九郎ちやん九郎ちやんお兄さまやお姉さまや父樣といつでも一所に入つらつしやるのだと申しましたら心から滿足らしくうなづいて居られましたつゝ此頃子供博覽會を見せに九郎ちやんを、つれて參られましたら、母樣は三越にもいらつちやるねへ日本橋にもいらつちやるわねへと申されたさうです。何んといぢらしい言葉ではありませぬか。眞に私共は幼兒の口を通して大眞理をきかされます。九郎ちやんのお宅では肉の母樣を失ひて尊い靈の母樣を得られました。此靈の母樣は九郎ちやんや其兄姉方と必ず一所にゐられます。此尊い母樣は必ず神樣とゝもに皆さんを保護して下さいます。親い子の中に子は親の中に生きるに至つて、初めて眞の親子、永久の親子でありましやう。

　九郎ちやんの御兄弟方は肉の母樣を失なつても尙よい子におなりになつた樣です。兄弟仲よく、皆なで助けあつて父樣をお慰めになります。わけても此頑是ない九郎さんは父樣を哭せも致しますが亦慥かに父樣のお慰めです。此間もすぐ上の鈴江さんが哭きましたら、九郎ちやんが姉さまナゼなくの、九郎ちやんの爲になくのなら九郎ちやんあやまるからなかないで頂戴よ姉ちやんごめんなさいよと云はれたさうです。見るもの きくもの涙の種であります。けれども世にはかゝる慘事は決して九郎ちやんのお宅ばかりではありませぬ。あすこにもこゝにもずい分見きゝするのであります。我々とてもいつこんな場合に出會はないともかぎりませぬ。其時に殘された人々が眞に尊い自覺にはいる樣になり度いものでありますが、それは兼ての準備が必要であると思ひます。九郎さんの母樣は慥かに其準備をよくしてお置きになつたと思ひます。信仰もなき理想もなき人間は實に不用意に世を送りましてかゝる場合に出あひましては只悲歎の涙にくれ、失望の淵に沈むのみでありますが、九郎さんのお宅では兼て母樣が吹込んでお置きになつた其精神が非常な力をもつて發して參りました。殘された皆さんの中に母樣が復活せら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

れたかの樣に感せられます母樣を我中に有つ間は如何なる誘惑も其人を傷くることは出來ませぬ。私共眞に學ぶべきであらうと思ひます。あー九郎ちやんの母樣は慥かに賢母中の賢母、良妻中の良妻でありました。

金森小壽子姉略歴

小壽姉は元治元年八月廿三日、岡山縣御津郡靑江村に生れた。父は西山直三、母はみわ子、小壽姉はその次女であつた。幼にして儒者安住百太郎氏の薫陶をうけ、十六歳の時神戸に出で、今の神戸女學院に入つた。明治十五年十九歳の時第一期生として同院を卒業したが、學績優等の故を以て、特に招聘せられて同學院に敎鞭をとることゝなつた。

其後職にあること二年、二十一歳の時感ずる所ありて職を辭し、郷里岡山に歸り、一女學校を創立した。之れが卽ち今の山陽女學校である。明治二十年京都同志社敎授たりし、金森通倫氏に嫁することゝなり、七月七日岡山敎會堂に於て華燭の典を擧げ、夫に從ひ直ちに京都に轉住せられた。明治二十三年通倫氏同志社を辭し、東京に上らるゝ事となり、一家を東京に移され、明治三十五年には又擧家北海道に轉任せられた。而して居ること二年、明治三十七年再び東京に歸られ、今日に及んだのである。

小壽姉は四男五女を擧げられた長男太郎氏は、二十五歳にて法科大學に、末子九郎氏は六歳にて幼稚園生であるが、何れも極めて健康にして殆んど藥餌を煩はさないとの事である。之れ實に姉の育兒衞生等にいかに經驗あり、智識あるかを證するものである。而して姉は初め敎育を以て身を立んとせしほどにて、生來深く敎育事業に興味を有し、結婚後も家事の多忙なるに拘らず、京都にては華族女學校京都分校に、札幌にては同地高等女學校に、行く先にて育英の道に盡し、三十七年居を東京に定めらるゝや子女は益々手を要し、加ふるに良人通倫氏は年中殆

んど地方に出張して、家事内外の事一切其の双肩にかかれるにも拘らず、東京音樂學校及女子高等師範學校に一週數時間の倫理教授を受持ち、熱心に忠實に之に盡された。

姉の受洗は神戸女學校在學中であつて、其熱心なる信仰は學生間に特別なる感化を與へ、其の教師となるや、生徒の愛敬を受くる實に一通ではなかつたとの事である。其後良人の境遇の變化と共に、思想信仰の上にも幾多の動搖がないでもなかつたが、信仰の根底を握つて居つた事は慥であつて、如何なる時にも悲觀せず、何事に對しても不平不滿を抱かず日々感謝して己が職務を盡し、常に夫を慰籍し、奬勵し、子女に對しては其經驗と智識とによりて遺憾なく之を教養し、九人の子女は世人が偉人を崇拜するが如く彼女を崇拜してをるとの事である。其地位名譽を思はず、事業に貴賤なしとし、日常の家事も講堂の講義も、同じ心構へにて熱心忠實、己を忘れて盡せしが如き、何れも根底に何物かあらざれば能はざるところである。その良人に對する貞淑忠實なる眞に世の模範たるに足るものにて、良人が如何に失意の時にも、之れ後日の教訓なり、成功の經驗なりと微笑して之を勵まし、一家の財政、社交其他一切の内事は悉く之を知らしめず、良人をして全力をあげて其業に從はしめるのであつた。今の洋館の邸宅の如き、金森氏は唯だ設計にあづかりしのみにて久しく地方に巡回せしが、留守中多忙の間に姉は大工、職人、材料、其他一切の交渉及び工事の監督に當り、遺憾なく之を竣工せしめ、造作庭園其他萬般の事に至るまで全然終了せし時、良人は飄然歸宅し其新邸に入りて彼の建築報告を聞いたとの事である。以て如何に家事に當られしかを知るべきである。

然るに明治四十五年四月四日入浴の際發病し、腎臟炎となり、中途頗る輕快に赴かれたが、病再び革まりて、遂に去五月十一日午前十一時永眠せられたのである。斯くて姉は四十九年の生涯を地上に委ねて、内外の愛惜の中に天上の人となられた。

（聖山生記）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

行く春の頃

野口せい子

かざしませ口つけ見ませ友よ行く春はかへらず八重櫻花

花かざしすればかすかに我髪の匂ふ悲しさ行く春の雨

若葉より絹に似て吹く朝風に身をば浸しぬゆめのさめ際

人をさけ納屋のうしろの壁に倚り今日も淺間にしづむ日を見る

行く春を追へる心のすさびより花もかざしつ歌もうたへり

櫻草春を三とせの思出よ花咲く頃の淡きかなしみ

ふと見つる鏡の前のわが影に母の面輪のなつかしさ湧く

捨てかねつ歌思ふ事いとし子に引かるる袖をはなし得ぬ如

我自覺あはれなるかなぼろの衣縫ふ時などにややきざし來る

幼くて人の死などに耳早き吾子の宿世を泣く夕かな

此玩具死ぬまでもつと死ぬことを明日か明後日の如く思へる

捕へ來しさんぼの番をせよといふ蟲のけらいと母をなすかな

雨となる夕かなしも糸繰りのざれ唄聲の近く寄り來て

歌を詠むそれも道具ぞ習はんと云ふ人のあり泣くものは誰ぞ

夏八句

和

小順禮の武藏野辿る夏淺し
草分けの家に宿りぬさつき雨
南天の花こぼれたりむら旅籠
時鳥聞く野社の繪馬はげて
五月雨やチラ／＼赤き小提灯
神杉や翠簾ゆらぐ夏の朝
墓原にひる貌多き怨みかな
笈下す渡船間近の夏木立

かゞやき

みどり

咲き出でにけりな百合の花の
　名知らで蒔きにし種子は生ひて
あしたのみ露に今こそさかりよ
　綠りの園生に薫りを添へて
かゞやき初めけり星のかげの
　さぎり夕靄拂ひわけて
紫まばゆき御衣をひきはえ
　仰ぐみ空に光りを添へつゝ
しぼまで常世に散らさで永久に
　薫りて匂ひていや崇く
み空の星よ地の百合よ
人皆のあさき夢さめむまで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

少女の指導に就て

少女と讀物

宮田脩

△近頃の少女雜誌

近頃の少女雜誌に現はれて居る少女の思想は著しく悲觀的に傾き、また與へんとする雜誌の撰擇に苦しむといふ事を聞きます。私も少女雜誌は一と通り目を通すやうにして居るが、事實を申せば私は投書欄は能く見るが、他の部分は極くざつと見る迄であります。然し一般少女雜誌には少女小説なるものが大部分を埋めて居り、之れには悲觀的の文字の多いのは事實である。勿論、人情笑はせるとか、健全な行爲狀態を寫すよりも、泣かせる方が寧ろ容易に感動を與へ、また讀む方も泣かんと準備して居るのであるし、書く人も亦笑ふより泣く神經質、悲觀的の人が多いので、從つて涙の文字が多い。之れは喜ぶ事ではない。今日は女子にはもつと進取的な氣分を養はなければならぬ。男子の少年雜誌は冒險談、武勇談が大部分を占めて居るが、女子はこういふ事は一向沒交渉で興味がのらぬと見え、さういふ文字の現はれるのを厭ふて居る。經營者はまた賣らんが爲め、讀者の滿足を求めんことのみ考へて、涙の多い小説を多く載するといふ事情である。營業から云へば萬止むを得ぬ事であらうが、教育的に國民に健全な思想を植え付くるには、どうかもつと考へなければならぬ。

△余が欲する少女の讀物

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

自分の考へを申せば、先づ西洋文學には割合に健全で面白いものがある。それをその儘譯してもよいが、また大人の讀むものを換骨脱胎して、子供の讀み物にしても面白いと思ふ。例へばセーキスピヤをラムが書き直した樣に　有名な文學を少女向きに改作して讀み物を與へる樣にしてはどうかと思ふ。次に自然にもつと親しませ、或は興味を萬有の化學界に導いて行く事實が、小さな人間界の煩悶から引き出す事になる。それ故科學を通俗化し、文學的に知らしめたいものである。之れは單に雜誌斗りでなく日本には書物としても極めて少いので、科學者は通俗の事に手を着ける暇なく、著術家はまた子供となりて斟酌して書く事が出來ないのであらう。之れ等は從來も記者に向つて助言したが、なか／＼行はれ難い事と見える。

△讀物の撰擇とその感興を與ふる法

扨子供に雜誌を與へるのに、子供の自由に任せて

置く事は、極めて危險な事である。子供は勿論教育的に撰擇する力はなし、且つ大人と違ひ、子供の雜誌を見るといふのは、友人が見て居るとか、他人から續いて送つて來るとか云ふと、それより外には雜誌はないものだと考へる。それ故無方針で濫讀させずに、與へる人が撰擇すれば、効果のあるものである。男子の雜誌にある突飛な冒險談も困るが、昔の女と今の女とは違ふといふ事を知つて、少しは異つたものを與へて見たらばどうか。植物や動物も初めは之れを擬人法により興味を與へると次第に物それ自身の化學的の興味を覺ゆる樣になる。現に自分の學校で實驗した事であるが、學藝會で今月は雪、來月は百合、その次は月といふ樣に主題をきめて、それを中心にして三四回試みた事がある。さうすると例へば百合といふ時なら、一人が祇園の百合子の話をすれば、或者は百合の歌をうたひ、また他の者はその百合を科學的に解剖して説明すれば、また百合になぞらへた活人畫も出るといふ風で、あらゆる方

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

面から百合が研究されるので、百合の觀念が皆の頭に明瞭になつて來る。かやうにして以來一般の生徒が、植物動物に興味を覺え、之れに親しむ傾きが出來、また學校の圖書室からも、それ等に關する書物が多く讀まれるといふのである。その點からいふと男子の雜誌は割合に考へて編まれて居る。時事新報社から出る「少年」の如きは、地理、歷史の智識を極く平易に面白く與へやうと務めて居る。少女雜誌でも倉橋君の顧問をして居る「少女畫報」などは、この點に注意して居るが、發行日の新らしきと、今迄少女小說に馴れて居る眼に一寸興味が乘らないので、豫期した程の發行部數がない樣であるが、私などはこの雜誌を推選し、また地方などでも敎育當事者は考へて勸めて居る樣である。かやうな雜誌が進んで精神的に擴張せば、理想的のものが出來はせぬかと思ふ。

△敎育は社會との協力を須つ

雜誌で一番困るのは投書欄である。隨分放埓の文字が幷らべられて居る。これは敎育界は形式に傾き過ぎて、その鬱憤が斯樣な處に洩れるといふ事もあらうから、學校自身も反省しなくてはならぬ。然し中には自分の心からではなくて、周圍の文字に動かされて、子供らしくない、いやらしい文字を書くのもあらう。また雜誌上の交際といふものゝ極めて輕薄な、昔の人が見たならば、それこそにが〳〵しいものに數へるであらうと思はれる。また挿繪や寫眞の如きも大に注意してもらひ度いものである。寫眞などはどの雜誌も貴族的に傾いて居る。成る程平民の子よりも某子爵令孃とでも云つた方が張り合ひがあるであらうが、その雜誌を手にする大半は平民の子である。それに元來虛榮に陷り易き少女の心を、猶虛榮を挑發されざるを得ないものが多いやうでは困る。また學校の寫眞も多く出來るが、建物の立派なのを掲げる斗りでなく、もつと活動した處が見たいものである。挿繪もやたらに目の大きな不自然の女の顏などはよいと思へぬ。自分は美術繪畫の事は一

向門外漢であるから、美術思想からは之れを許する事は出來ないが、敎育上から注文すれば、あんな人形ともつかず、人間ともつかぬものよりも、もつと實物に近い、自然のものを見せたいと思ふ。また繪の中にある文字が甚だ困る。然し斯樣な注文を持つて雜誌を求むれば、どれも氣に入らぬ所が多く、一々それを擧げたら、書く紙もなからうし、またそう

云つたら實際ローマの僧院時代の昔をくりかへさなければならないかも知れぬ。要するにさま〴〵の世態、人情の中にありて、健全な思想を與へて行くのは、敎育者の任務であらうが、また社會に與ふる注文が幾分聞かれて、共に共に相提携する事が出來れば、之れに越した事はなからうと思ふ。

東西の少女

三谷民子

△信仰ある生活

日本のお伽噺や昔譚は、繼母に苛められたり、鬼婆に食はれたりするので、勸善懲惡の敎へにはなつて居りませうけれど、その善をするのは罸を退かれる爲めで、惡い事は只押へ付けられてしないといふ迄で、子供心に常に果す事の出來ない重い責任の壓迫を受けて居り、從て一體の調子が悲觀に傾きます。少女も亦涙を樂しむといふ傾きがあります。

これが西洋の子供ですと、常に親から親切を他人にする事の出來るのは、人間の特權であるとして敎へられているので、花にも鳥にも眞の愛情を注ぎ、人の爲めに自分の身を喜んで犧牲にし、神の賜ふ自然なり、人事界の事を感謝して受ける事が出來る信仰が養はれて居るので、いかにも無邪氣に延び〳〵と

育ちます。これが東西の少女の大變違ひの出來る原因かと思ひます。

△亡き父のゆくへ

一つの例を申しますと、昨年淺間山上で噴火に出合ひ、悲慘の最後を遂げられたヘール氏の妻君は、私と親友の間柄でありますので、四人の忘れがたみを連れて、伊勢の津に歸る途中、私の處に四五日宿をなすつたのです。私はこの不幸な母子をどうかして慰めて上げたいと思ひ、六つと五つの兄弟を自分の部屋に連れて來て、お人形を貸したり、面白い話をしたりなんぞして樂しく遊ばせて居りました。私はふと無邪氣の子供達の顔を見て、父親の事をどう考へて居るであらうかと思ひ「お父さんはどこ」と問ふ眼にはもう涙が一ぱいになりますと年上の子はIn heaven（天に）と答へたきりであります。そうすると年下の子の云ふには「お父さんはキリストが度々山に上つて神様の聲を聞かれたやうに、山に登ると神様がCome up here（登つてお出で）と仰つしやつたから、All right（ハイ）と云つて、直ぐ登つていらつしやつた。私達も神様がお呼びになつたら、直ぐ父様の居る神様のお傍に行くのだ」とこう申すので、眞に負ふた子に敎へらるゝ感が御座いました。父親のこんな悲慘な死をも、かやうに美しく考へて居る事が出來たならば、成る程この子供が成長して後、思ひ出しても、只泣き入る斗りでなく、高尚な感じを受くる事が出來やう。母たる人がはりさける程の胸の悲しみを抑えて、子供の爲めに父の死をかやうに語り聞かせた賢き心掛けを、誠に有難くゆかしく思はずには居られませんでした。

△母親は最良の友

西洋の諺に「親は子供の最良の友人である」といふ事がありますが、西洋のお母さんと子供の間には誠に美しい友情が成り立つて居ります。私が外國に居ります間、恩師ミス、ミリケンと一緒に、その御

兄弟の家に暫らく泊つて居りました。するとその家の奥さんが病氣をなされて、けふは快いので、もう食堂に出てもよいといふ最初の日でありました。小さい息子さんは、母さんを二階のお部屋から手を取つて、助けて梯子を降り、食堂の椅子に腰掛けさせてあげて、いかにも大な手柄をしたやうに喜んで居ります。母さんも「お前が助けてくれたお蔭で、食堂に來る事が出來、こんな嬉しい事はない」と云つて居られる。日本のお母さんなら「うるさい、それ彼方に行つてお出で」といふ處でも、子供のする事を時を費して受け入れる處が、いかにも美しいと思ひました。それ故子供は何んでも母親に打明けて相談をし、母親も友達になつて親切に子供の事を考へてやるといふ風て、子供が成長するに連れて起る疑問も一人で思を腐らして居るといふ事はないのです。

△子供らしいかれ

よく學校などにお母さんが娘さんを連れて來られては「どうも家の子は男の樣で、何にも氣が付きませんから、どうぞ何分よくお叱りなすつて」などゝお仰いますが、私はいつも「御安心遊ばせ、今にもう二つ三つ年を取りますと、子供らしくして居れと申しても、なか〳〵さうはなつて居りません、いろ〳〵の事に氣が付き出します」と申しますのです。年少の間は女の子である、女の子であると云つて、無理に作つて終うよりも、充分無邪氣に、自然に育てたいものだと思ひます。私の妹なども、私の許に居りますが、數へ年の十五になるのに、ほんの子供で、この間もゆづり葉の木の下で、二三人寄つて、何かこそこそやつて居る。何して居るのであらうと思つたら、妹の人形を鼠に食はれたといふので、それをゆづり葉に載せてお葬式をして、讚美歌を歌つたり、「遠路御會葬下すつて有難う」などゝ挨拶の眞似をして居るので、私はふき出して終つたんです。然し子供で居る間は短かいのですから、充分子供らしく遊ばせて置きたいと思つて、私は何も世話を燒かないんですよ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

謠ひつゝ働く生活

金子白夢

謠ひつゝ働くと云ふほど理想の生活はない。

・現代は一切が「生活」と云ふ言葉のうちに約されて仕舞ふて居る時代である。此の生活と云ふ現實のうちに「謠ひつゝ働く」と云ふ生活を味ふのが現代の深い要求ではあるまいか。

　謠ひつゝ働く。先づ謠ふと云ふことから味はつて見たい。一體謠ふと云ふことはあらゆる自然の聲である。貫之翁も「花になく鶯、水に住む蛙の聲を聞けばいきとしいけるものいづれか歌をよまざりける」と説いて居る。自然の胸の深い所から無意識的に本統的に叫ばれた聲が歌である。彼等は歌ふと云ふ自覺なしに歌ふて居るのである。歌ふと云ふ自覺なくして歌ふて居る所に所謂自然の流露とも云ふべき一種の靈妙の匂ひがたゞよふて居るではないか。自分は自然の聲を聞くときに無理のない一種のハルモニーがそこに流れて居るに驚かないことはない。高い自然の聲は其のまゝに神の聲であるとも聞きなされるのである。あの小鳥の歌ふ聲、あの蛙の啼く聲、靜かに耳を傾くれば天地悠久の想ひが深い〳〵底から湧いて流れて溶けて自分の心をつかんで高い〳〵國に引き行くようにも感ずる。詩人が「蛙の聲は神の聲である」と云ふ一句が深く〳〵味はれるのである。自然ほど率直に神を語り理想の光を漏らして居るものはない。ヘブライの詩人が

すべての淵よ
地よりヱホバをほめたゝへよ
火よ　霰よ　雪よ　霧よ
み言葉に隨ふ狂風よ
……………………
みなヱホバの聖名をほめたたふべし。

と謡ふた中に人格化されたる自然が一種の森嚴壯大な音調をなして天地の神を讃じて居る光景が活き〳〵と目に映じて來るではないか、其の聲が耳に聞こえて來るではないか、何等の莊嚴な一境であらう！自分はこう云ふ所に分け入りては天地の美に醉はされて唯々溶け込んで仕舞ふやうな氣分になつて來るのでる。

「謡ふ」と云ふなかに充分に人間の品性が聖化され融化され純化されて行くのは味ひ深いことである。自然と我と渾和するも謡ふと云ふ一境によつて實感に上つて來るのである。ショペンハウエルが「音樂は一時的の解脫」だと說いて居るのは此の深い意味を體得して之れを宗敎的解脫の方面に解釋したのであらうと思はれる。どんな人でも音樂によりて純化されたときの氣分と云ふものは其の心持其のものがパラダイスである。謡ふと云ふ所に我と彼とを一にする妙用が働いて居る。天地は謡ふと云ふ靈妙なる絲によりて結び付けられてある。ショペンハウエルが「かの天上の沈默せる夕の星と此の地上に沈默せる小石とは宵々毎に共にベースを謡ふて居る」と云ふて居るが玆に彼と此との妙合の作用を語つて居る一切は妙合の作用である。此の妙合の作用のなかに溶け込んだときに心靈は無上の歡喜を感じて聖化されるのである。

現代の文明が人間の心靈を器械的にばかり働かした結果、生活の妙味と云ふものは次第〳〵に衰へて人間の心靈は科學化し器械化し物質化して少しのゆとりと云ふものもなく生活に匂ひと云ふものが消えつゝある。斯くては人間生活は喜ぶべき現象であるとも思はれぬ樣になつて來つゝある。

コンベンショナルな生活と云ふ埒内にとぢ込められて仕舞ふて心靈は次第〳〵に死して行く、これが現代の生活と云ふものであるとすれば生活ほど苦痛なものはない、呪ふべきものはない。もつと自然なもつと悠々としたもつと溶け合ふた境界に立たなくてはたまつたものでない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

どうして悠々たる一境を味ふことが出來る？「謠ひつゝ働く」と云ふことである。勞働は神聖だと云ふても物質化され器械化され行く勞働の中にはそれほど神聖な所はないと思ふ。カーライルが現代に再生したら「現代の勞働は非神聖だ」と叫ぶであらう。神聖と云ふ意識は勞働の中に神的光明が顯はれて來るからである。次第〳〵に此の神的光明が消ねつゝ滅びつゝ行く此の勞働のなかになんで神聖な所があるだらう。寧ろ現代の勞働は人間心靈の自殺であり自滅である。此の自殺から人間の心靈を救ふて行くものは高く信の光に憧がれて行く生活である。

高く信の光に憧がれて行くと云ふもののそれは單に空想ではない夢幻ではない。現實を離れない信の光に活くるのである。謠ひつゝ働いて行く生活である。美の中に神聖を意識して人生を藝術化して行くのである。更に高く進んでは人生を宗教化して行くのである。宗教化されない人生は無意味である。人生を離れた宗教があり得ない樣に宗教を離れた人生はあり得ないのである。人生と宗教とが融合し妙化して人生そのものが宗教によりて味つけられ宗教が人生の生活そのものゝうちに生きて來ると云ふ所に眞正の意味の「人生」があるのである。生に徹底した生活、生活に徹底した生の味。こう云つた所に宗教があるのである。古詩人が

全地よヱホバに向ひて歡ばしき聲をあげよ
欣喜をいだきてヱホバに事へ
歌ひつゝ其の聖前に來れ

……………………

感謝しつゝ其の聖門に入り
ほめたゝへつゝ其の大庭に入れ

と歌ふた境界を現代的に解釋すれば「謠ひつゝ現實の生活に入れ」と云ふ意味に味ふことも出來ると思ふ。宗教上の悠々たる「謠ふ」と云ふ一境を離れた生活は眞の生活ではない。詮する所は「歡びつゝ働き働きつゝ歡ぶ」と云ふ所に歸するのである。

「神と偕に樂み神と偕に働く」。こゝに誠の人間らしい生活がある。

話し方の研究

久留島武彦

△話しに就て苦しむ點

話し方に就て私の始終苦しむ點は、どうすれば聞く者に自分の思ふ丈けを徹底せしめ得るかといふ點であります。今の我々は如何に話すべきかのお手本を社會に持たないのであります。昔はお使者の口上などいふ特別な役目があつて、如何にせば先方に充分の敬意を表し、我が主人の貫目を下げず、第三者であり乍ら當事者の意思を徹底し得るかといふ事につき、随分苦心もし、その口上をも練つたものであつた、然し昔の人は人の心は知り度いが、自分の心は成る可く知らせまいといふので、「君子は容貌愚かなるが如し」などゝいふのを理想として居つたのであつたから、務めて自分を匿し、内側の方は見せず包んで、向ふを見るので、只單に話させて聞くのであつた、それ故に我々の内面の心を現はすといふ眼なども、成る可く動かさない工夫をしたものである。不幸にして我々はその遺傳の上に立ち、今日はどうすれば自分を最も能く現はす事が出來るか、我が内心を人に徹底せしむる事が出來るかといふ急務を研究しなければならなくなつて來た。此處には先づ話方に就ての一般の智識を述べ、次にその部分部分の訓練に就てお話して見たいと思ふ。

△話す事は二分の一の作業

話し方といふは小學校に於て讀み方、話し方、書き方、綴り方といふその話し方を取つたのであるが小學校のは子供自身に話させ、同時に教授訓練を與へるのであるが、此處でいふ話し方は大人が子供に

話す場合の話し方である。一般の人は子供に話すには何か話し方が違ふだらう、子供に向つては子供を扱ふ骨を握る事が、話す事よりも大切ではないかと考へる。私の處に品川の方の落語家の前座務める人が弟子入りをしたいと云つて來た。その人が云ふのには、自分は子供に話す時には、特に苦心して、踊らん許りにしてやるが、どうしてもその骨が分らないので、上手にいかぬ故、どうぞその骨を敎へて貰ひ度い」と云ふ事であつた。然しこの人はほんとうの話を知らぬと云はなければならぬ。骨とは子供の捕まへ所の秘點で、その秘點は何かといふに、子供の持てる過去の經驗、現在の智識、興味に、こつッと當て嵌めること、簡單に云へば子供の考へと此方の考へとをこツつりと、手取早く當て嵌める事で、畢竟子供の持てる土臺の緣に依つて、子供が極く早く短く、早座に解せらるゝ樣にするのが、話し方の上手といふので、下手はこの骨が摑めないのである。然るに大概の人は子供によいお話をすれば、いつでも判り、面白い話ならいつでも聞くと思つて居る。卽ち話しさへすれば判つてくれると思つて居る。然しよくよく研究して見ると、此方がよい、面白い話をして居ると思つても、子供はそうは思つてくれぬ、骨組に力を盡し、手を振り、足を動かして話しても一向子供か聞いてくれぬといふのは、何が違つた他の仕事が入らなければならないのではあるまいか。自分の考へるのに、話し方は話す目的からいふと二分の一の作業である。

△最もよく聞かしむる法

話す事は話す目的から云ふと二分の一の作業であるとは、如何なる事かといふに、例へばお寺の鐘がゴーンと一時が鳴る、茶店の婆さんはその眞下に居りながら、逐聞かなかつたといふ。丸の內を步いて居ながらドンを聞かない事は稀らしくない。甚だしきは火鉢を圍んで差對ひになつて居り乍ら、甲の云ふ事を乙が聞かないで「オイ君、今何て云つたんだ」

なざゝ聞き返へす事等が往々ある。これは卽ち話すといふ事は話し方と、聞かせ方とが二分の一宛を占めて居る證據である。然るに如何にせばよく話す事が出來るかと研究する人は澤山あるが、如何にせば、最もよく聞かしむる事が出來るかといふ事に就て注意する人は殆ど無い然し話す以上はその目的が聞く人に徹底して、効果を奏しなければ鳴る鐘や、響く鈸と擇ぶ所がない。而して人に聞かしむるには、準備作用がなくてはならない、その準備として必要なるは、第一場所、第二時、第三人、第四が話す自分である。卽ち昔から云ふ天の時、地の利、人の和といふのも同様である。

△場所の品位

之れに就ては實例で話すと一番よく判る。私共が地方に招かれて話しする時或は縣會議事堂で、或は小學校の講堂で、或は劇場で話す事もある。○劇場は子供の出入りにも善し、大勢入れる事も出來、聲の響きもよいからと云つて、其處を會場に擇ぶのは地方でも進んだ敎員である。學校縣會議事堂等は之れに比して隨分不便利もある。折

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

角話に興が乘つたと思ふ時、小使が村役場の手紙を持つて入つて來たり、縣會議員が來たといふては「どうぞ此方へ、どうぞ此方へ」と大聲をたてられたりするが、然し話し終へて校門なり、議事堂の門なりを出る時は、幾千の兒童は皆帽を取つてお辭儀をし、遲れざらん事をこれ恐るといふ風である。然るに劇場で話した後では、子供等が「今話したのはあれだよ」「あの人が今話したんだよ」と指さして、あれが〳〵扱ひにする。場所の効果はこれ程著しい相違がある、帽を取つてお辭儀をする時の生徒の心には、多少何か効果を與へる事が出來たので、いかにも愉快であるが、「あれが〳〵」と指さす時には、もはやその講話者に何等の尊敬も無い印で、從つてその効果は零である。即ち話す場所としては大層便利であり、從つて話しは上手に出來ても聞かせるその場所に添ふ習慣、聯想が附加して、その話しの効果を制限し、割引するのである。

△會場の設備とその準備

前に述べたのは場所の品位に就ての注意であるが、有形の問題に就ては更らに考へなければならぬ、演者はもしずつと控室に入つた切りで自分が立つて話しする場所を知らないで講壇に立つなどは、不心得千萬である。話し

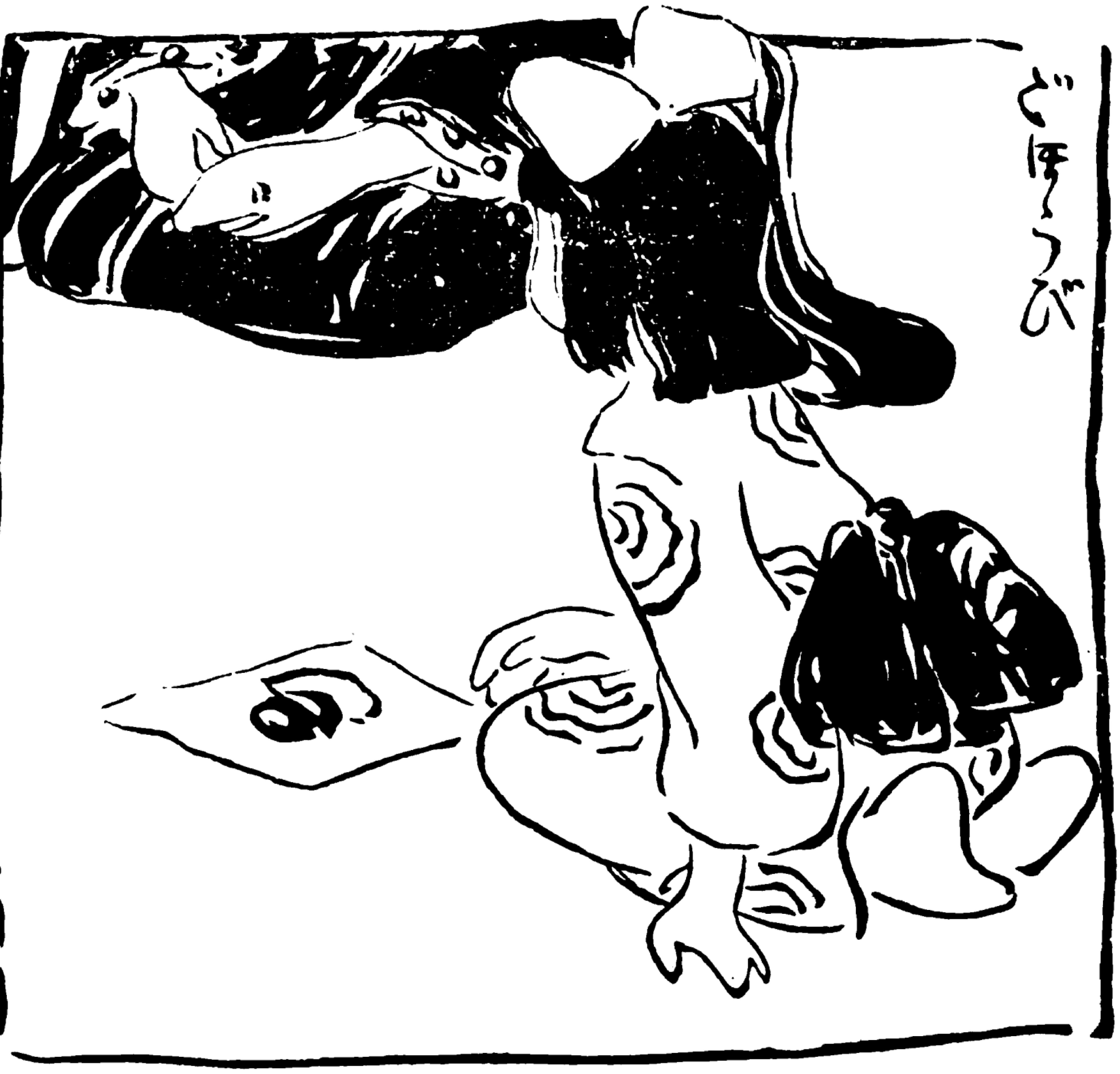
手は場所はどういふ風か、自分が立つ所は、中心になり得る所か否か、自分が立つて話す時その左右の處に注意を破る出入口はあらぬか、又話す聲に對して外から之れを亂すやうなもの、例へば左右の窓より風を受けては居らぬか、自分の聲の分量は、その室にどれ程が一番相應はしいか、また丁度講壇に立つた時、自分の心を動かすものはありはしないか等を考へなければならない。話す事は精神作業であるから、充分話す前に周圍の狀態を調べなければならない。もしその注意を疎かにして、話す時、電車の音がゴウ

ゴウ聞えるとか、風がピユー〳〵と話す聲を遮るとか、人の出入りが始終講壇から見えるとかいふ樣では、それに戰つて敗けまいとするので、非常に咽喉を傷める。これがかの淫曲や鼓を打つ人がどう々々と瀧の音や、波の音の寄する所に行つて、それと戰つて敗けない樣に稽古する所以で畢竟精神の修練である。殊に子供を多數新らしい場所に集めると、そわ〳〵とする、これは新らしい場所から無意識の刺戟を受けたので、場所の與へた不安、愉快、好奇心等が、小さき心をそゝり立つるのである。聞く人にさへこれ

ほどの場所の影響があるとすれば、話す方には猶更らである。それ故、室の空氣光線の出入を考合せて、少くとも演説する者から四十五度以内は、充分に保護する必要がある。

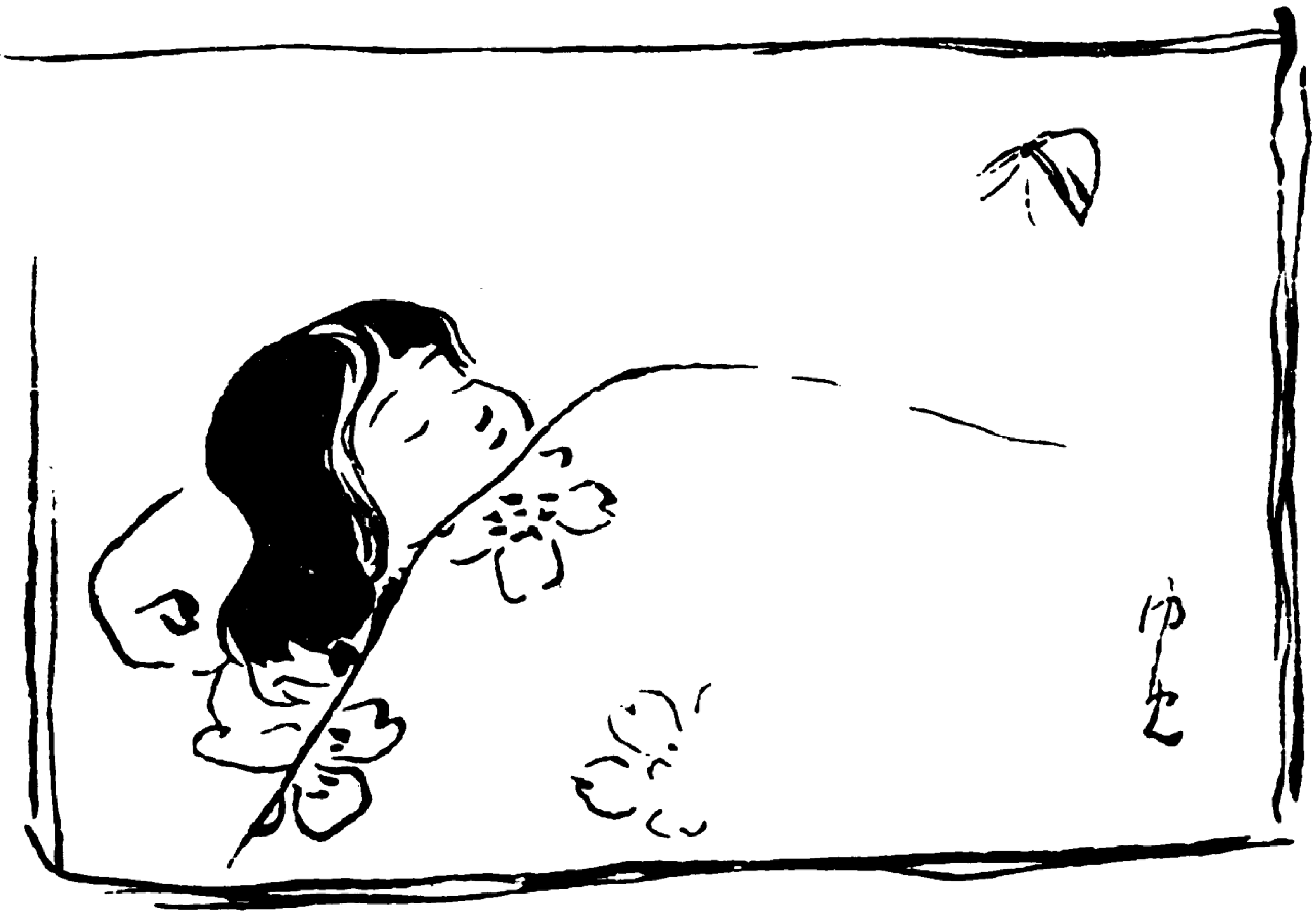
△聽衆の注意を纏める法

もし聽衆の注意が亂れて居る時には、話す人がその注意を纏める工夫を要する。それに就て自分の感心したのは福澤諭吉先生である先生の演説の前には大低誰れか長い演説をされるので、聽衆は倦み切つて



居るのであるが、やがて福澤先生は講壇の後方にある戸を排して出て來られるといふと、必ず羽織を着ながら來られるそして悠々と端を合はせ、紐を結び、やをら顔を撫でゝ「今日諭吉のお話しやうと思ふのは別の事でもないが」と口の中で呟くやうに云つて、さて「獨立自尊である」と云ふ聲の聞える時から聞いて、何も聞き落す事はないのである。初めの中は先生はなぜあんな事をなさるのかと思つたがこれこそ聽衆の注意を纏める爲めであつた。先生が

出で來られたかと思ふと羽織を着る。ハテ妙な事をすると思ふと悠々と端を合はせ紐を結ぶ。それから顏を撫でると思つて見て居る間にざわつして居る講堂の人は、皆注意が一所に集まつて、大事な話をする頃は皆の心は、話し手の中にあるのである。福澤先生の事はもう望んでも見る事は出來ないが近く和田垣博士などは、この傳をやられる。博士が椅子に腰掛けて居る間は、極めて無雜作なものである。やがて講壇に立つと、頻りに高く揭げてある自分の演題を見て、講壇を彼方此方歩るきながら「道德と國家の本源を論ず（例へばこれを題とすれば）か。吾輩はこんな六ケ敷題を今始めて見たのだか、どうも困る、こうして居る間に考へなければ道德と國家の本源を論ず」と繰り返へし〳〵斯樣な事を云つて居つて扨て話し出すと材料澤山の話を、一時間でも、二時間でも話されて、なか〳〵講壇で急拵らへのものではない。かやうに一種のペテンをやらない迄も聞く方の注意が他から妨げられないやうにするのは、話す人が工夫を要する所である。殊に今日我が國の日曜學校等では特別の建物を持たず、彼方に一團、此方に一團といふ樣に集まつて相互ひの聲に邪魔されながら、大切な精神と生命に係はる事を傳へやうとする事は、實に容易ならぬ事と思ふ。



△場所と聲

次に場所と聲との關係を考へ、その部屋は、どの位の反響あるかを見なければならない。西洋の或る有名な傳道者が、招かれて某地方に行くと、その傳道師の會話の聲が少さいので「失禮ですが會場を御覽下さいまし」と云ふと、「これ位ならば大丈夫ですと云はれたといふが、普通多くの人は、大きな聲を出し過ぎるのである。聲は大きくなつても聲が會場に擴がるか否かを見ればよい。新らしい場所に入れば、どの位に擴がるかを見るのがむづかしいが、人の話すのを聞けば分る。かくして自分と部屋と同化し終るのである。たとへ自分の左右四十五度の範圍が保護されて居ても、光りの工合で、すつかり注意を破る事がある、右の天井の丸窓から日を射る光線が入つたり、フートライトの如く足下から光線がさしたりしては、とても堪らない。先づ場所の有形の注意としては人の出入、空氣の流動、即ち風の入り方、光線の工合、この二つを見る事が大切である。

△時の問題

例へば理屈ぽい講演するその夜、近所に縁日でもあつて、ドンチャン〳〵やつて居るやうであつたらとても聽衆の注意を纒める事は出來ない。それ故演題を豫め定めて置いても、時に依つて變へる必要がある。けふは「燕の恩返し」といふ事を話さうと思ふと、時候が蒸暑くて、會衆が汗水になつて居るにも拘らず、三十分でも四十分でも、自分の考へて來た事丈けは話して終はなければ止めないとか、また二三人組んでやる時、前の人が長談議をやつた後に至つて、聽衆の倦み切つて居るにも頓着なく、長い話を續け、聽衆は話が終ると「ヤレ助かつた」と思ふやうではその話の効果が全く無いのみならず、前のをも皆殺して終ふ事になる。之れに就て私の常に感服して居るのは、江原素六先生であります。先年戸川殘花翁が舊領地の岡山を巡られた時に同行して諸所で演説をやられた。土地の者は戸川氏は舊領主として見る事を喜んだが。話は江原先生のを眼目と

して置いたのである。然るに戸川氏は舊領地に來たといふので懷舊の情に堪へなかつたのでありませう隨分長い話をせられたが、惜しい事には聲が低くて聞えない、聽衆は江原翁の話しを待ち望んで居つたが、やがて演壇に立つて「私は今日書いたものを持つて居りますから、これを讀みます」と話の筋を記したものを讀んだ。その爲めに前に演者の話が著しく引き立つて來たのである。然し江原翁の話も後で印刷に付したものを見れば、中々堂々たるものであつた。かくの如く二人以上が組めば、その組んだ人々が責任を分擔しなければならない譯である。此處の呼吸を能く呑み込んで居るといふので、高田實が川上音次郎を常に賞める材料にして居る。川上といふ人は實に場所と時とを知つて居つた。川上が舞臺に出て居る時は皆が安心してやる事が出來た。外の人が占め過ぎると川上が縮める、やり足らなければ補してくれるので、舞臺がきちつと締つて行く。それ故川上自身の藝は下手なやうに見えても、一幕のきゝ目が見える。然るに私はまだとかく自分といふ者を見せ度いので、いつも遣り過ぎては調和を缺く」と云つた。味ふべき所であると思ふ。

△聞く人

如何によい話をしても、話が聞く人の程度に合はなければ、頭の上を通り越したり、椅子の下を潜つたりして、肝腎の耳に入らない。よく母の會といつて招かれるので、此方はその用意で行くと、會衆の大部分が母たらんとする人、もしくは若い女子學生が多いなどゝいふ事は稀らしくない。それ故話す時には、會衆を見て話を建て變へる必要がある。

△話す者自身

よく人が話す時にはどういふ態度を取つたらよいか、手は何處に置いたらよいかといふ事を聞かれるが、之れ等部分部分の事に就ては次回に話す積りである。が、之れ等は話すといふ事より云へば、極めて末端

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に亘つた事である。而して話の始りは演壇に立つて第一の詞を發した時より始まるのであらうか。若し自分がその部屋に入つて來て、不爲體な身振りして椅子に倚り、立たうとして原稿を見失つてまごつき惶惶として壇に上り「人格と修養」といふ話をしたとするならば如何であらうか。諸君は必ず十話しても、七或は六より耳に入らぬであらう。その話は何處で割引したのであらうか、話の初まらぬ前の態度である。さう考へて見ると誰れが何といふ題で話すといふ時、既に既にその話は初まる。浮田博士が「婦人問題」に就て話すといへば、信用を以てその話を聞かんとする斯く考へると、實に大根本の問題に至らなければならない、故に此處には限りを附けて、話の初めは演者が會衆の眼に寫つた時から初まるとする。而してその態度、位置、品位等は、未だ話の意味は話さぬが、その話の準備として無言の作用をするものであると考へて、成る可く不快の感を與へぬ樣に務めなければならない。例へば演壇に上らうとする時でも、同じくは會衆に背を向けぬやうに、話す位置を占めるにも、右に手を振つても、左に歩んでも、少しも障りとなる者もなく、餘り前に乘り出しもせず、品位ある地位を占め、その地位を占めたら丁度角力取りが土俵に上つたと同じ覺悟を以て如何なる大磐石が來ても動かぬといふ見識を持たなくつてはならぬ。

また人は話す時は手はどう動かし、足はどうするといふが假りに首より上を簾で隱したとしたら、いかに手が微妙に動いても、足が奇麗に動いても、何等の意味がない。かうして見ると話するには顏が大切である。顏の中でももしその眼が動かなかつたならば、話しの半ば以上は死んで終う。かく考へて來ると、態度の根本は眼にある。殊に子供に話すお伽譚は眼を使ふより外ない。會衆を統括する時は、或時は聲で、或時は手を使つてもするけれども、その全體を引締めるにはどうしても、眼が大事である。眼が動けば手や態度は多少どうあつても構はない。

「君子は容貌愚なるが知し」といふ事を理想として來たお互ひ日本人は、大層この眼に就て損な遺傳を持つて居るが、今後は生きて居る眼であるから、生きて居る樣に磨いて、之れを充分用ひなければならない。部分部分に亘つた事は尚委しく次回にお話しする事に致しませう。

弘子の母樣より

——弘子も誠に丈夫にて寒中に風一つ引かず、よく肥り、近頃はよく笑ひ、又くう〳〵など獨りと語るやうに相成誠におもしろく、一人で家の中を賑はし居候。はやくみち子樣、あや子樣のやうに友禪のおべゝに赤いリボンでもかけるやうになつたらと、待遠しく思はれ候。教會へも近頃とかく御無沙汰がちに相成候へ共、弘子は私にとりては大説教者にて、神樣の限りなき御力と智慧と愛と日のあたり示され、日々畏しみて御旨は従はんとの心をはげまされ候——

弘子の母より。

三越の兒童博覽會

みさを

一度は是非見物して置きたいと願つて居りました三越の兒童博覽會々場前に、私は今、立ちました。入口から美しく並んだ陳列窓のどの側から觀て行かうかと考へながらはや中央の道を行くのでした、私の眼についたものから記して見ませう。

三省堂出品の教育品模型標本はこの部の白眉でせう。「伊蘇普物語」を主題にとつて造つた蛇と蟹、猫と鷄など……無線電信の模型のベルを折々通りかゝりの人が鳴らして行きます、巖谷小波先生考案のお伽寫眞之は私も買つて行つて幼ない人々の寫眞を入れて飾りたい氣持が致しました。と何處かで笛の音がしたと思ふ間もなく楷上の少年音樂隊がけだゝましく開始されてツト仰ぎ見ざるを得ませんでしたこの日は稀れに入場者が少ないと見えて賣場の人々

も皆んな所在なさそうに立ちあぐんで眼のやり場所に困つて居つたらしく一様に仰向いて楷上の樂隊を見るのでした。

會場は教育品部、服飾部、玩具部、保育部に分類陳列されて一々に注意して見たら面白いものも見つけ出されませう、私は玩具部とその賣店を見歩いてそれから楷上に行きました。

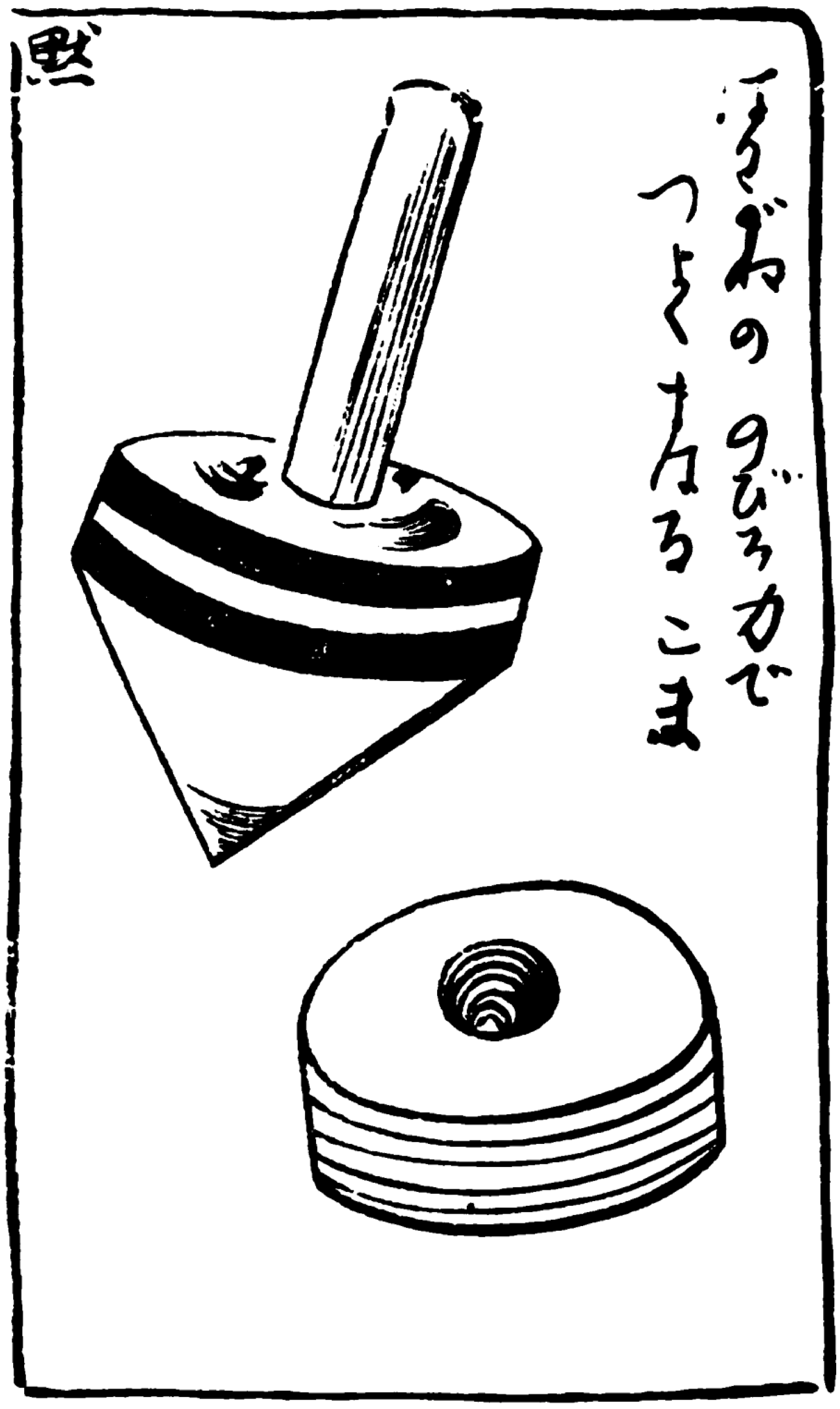
楷上には坪井博士の漫遊みやげ、各國の玩具が並べられてありました。急拵への會場は人が往き來する度に床が動いて陳列窓の中の首ふり人形が盛んに自動して居ります。おしやべり人形が向き合つて首を振りながら盛んに喚舌つて居る姿、横に身

を振るおばあさんがヨタ〳〵として居る所など仔細に覗いて見ざるを得ない。これは木の板を人形の型に切り拔いて彩色をしたもので底に丸みをつけて動きながら立つて居るやうにしたもの—達磨の變形したものらしい矢張木製の「ひつぱると足を動かして進むバツタ」は、シカゴ土産でしたが日本のずつと昔に用られた「ぶり〳〵」や今も田舍の一地方に玩ぶ「米搗き車」を引張り歩く兒童に見せたら或は考へ及んで手製にするかも知れぬと思はれました螺旋のハリガネの力を應用して廻はす獨樂はロンドンからの御土産でこれを應用して作つたといふ三越の「紐な

しで廻る獨樂」は今度新しく出來た玩具の中の面白いもので御座います。

この陳列窓の飾り付けらるゝ日、丁度博覧會の開場前日に私は二三の友と一緒に此所に參りまして、その日、これ等の玩具を自ら陳列して御出でになつた坪井博士に就いて一々の御話を伺ひました。

「これなんぞ面白いでせう」と御つしやつて―ロンドンの露店に賣つて居つたといふ露店の雛型、走りながら方向を替へて行く鼠――此のやうなものは玩具屋らしい玩具屋で買ふよりも、露店などに出て居るものゝ中から見付け出すのが面白いのでと今度は燒繪の笛など日本で見さうなものゝ而も珍らしいものを指して、これなど少し工夫すれば出來るものです、何しろ彼の地の人々は應用がうまいので、そのもとはといふと日本などからもつて行つて工夫を加へたものが少くないやうです―そう見えるので―

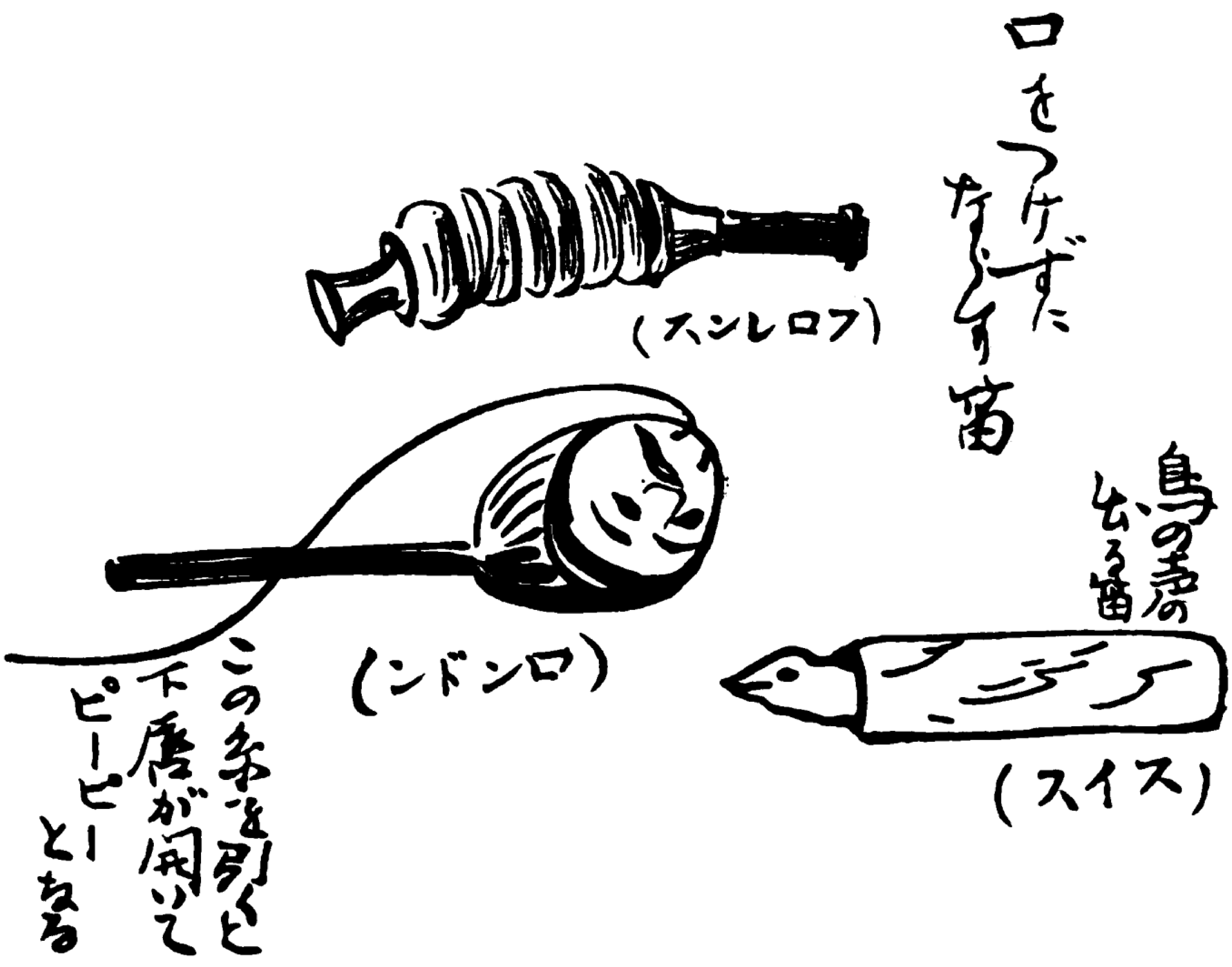


左樣！精巧なものは獨逸も米國も、英國も何れ文明國といはれた國々では一樣に立派なものを作り出しますが、所謂面白いものと云ふ側から云へば此等の國々よりも却て土耳古だの瑞西、殊に西班牙などからは實に面白いものがありますやうです、何處でも大抵玩具は手製に工夫して作つた時代のものが面白いので機械力で作るやうになつては玩具といふよりは參考品になつて來ます、兒童の遠慮なくい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ちつて見るよりも大人が大切に並べて眺めるものになり易い、ですから兒童に與へて玩具を撰ぶ上からも此の點を考へなければならぬと思ひます、日本に此等の種子がないのではなくして大人が子供の爲めに興味を以つて研究してやらないのです。行届いて研究し應用する上から歐米がいつも先を越すやうになるので云々……參考圖書の中の「各國の子供」「子供とあそびとに就いての本」も面白いものでした。

三越の玩具研究部參考室には「コドモ年中行事」として十二ケ月の遊びが配置してありました。併し此所に來る人々は久しく立止つて見る人は少なく、多くの人は食堂と余興場に入つてしまひます、蒸暑い初夏を余興の毎時間ギツシリと満員で御座います。



わが父の遺訓

身に泌みたる親の躾け　其の四

志立たき子

……亡父（福澤諭吉翁）は私共に何々すべからずまたは何々すべきものなどゝ命令がましき事は餘り申たる事これなく「德性は耳より入らずして眼より入るもの」と申す兼ての説により、絶えず自ら模範を示したるのみにて、訓令は出さゞりし事と存じ候。併し別項の一文は、明治十一年中父か手記して、わが兄弟姉妹に與へたるものにて、古錢は私も數枚所持いたし居り候。文中點を付けたる處は私が深く感じたる處にて、私の子供へも申聞かせたる次第に御座候間御覧に入れ候。

古錢配分の記

汝等の大父福澤百助君は舊中津藩の士族にして、年二十四歳の時より公用を以て大阪堂島の藩邸に住居し、我等の兄弟姉妹五名は共に大阪に誕生し、大父君は年四十五該邸に於て長逝し給へり。君幼少の時より學を好み、同藩の野本雪巌先生及び豊後の帆足萬里先生に從學して頗る才名あり。獨り才學を以て文壇を地方に專にするのみならず。其天禀温良にして能く物を容れ、思想磊落にして私德極めて方正常に人の爲めに畏憚せられたりと云ふ。吾の長逝は今を去ること四十年、余は不幸にして容貌をも知るに由なしと雖も、在世中の言行は之を汝等の大母に聞て詳ならざるなし。

大父君大阪に住居のとき、好んで古錢を集めて樂しみと爲せり。當時大阪の通用錢は今の銅錢即ち靑錢なるものを一文と唱へ、九十六文を錢緡に貫て之を九六の百文を名づけ、緡のまゝに用ゐたることに

て之を授受するの際必ずしも錢の數を計へず、大凡そ緡の長短を一見するのみにして、假令ひ或は一二文の過不足あるも之を問ふものなく、又世間一般に於ても殊更に緡の錢を減じて利を貪るが如き奸詐も稀なる風習なりき。或日大父君九六の緡錢二三條の內より古錢幾文づゝを選出して之を取り、其餘は又緡に貫て舊の如く爲し、之を放却して家人に告ぐるを忘れて外出し、日暮家に歸て錢緡の所在を聞けば豈計らんや家人は其錢を九六の全緡と思ひ、當日魚の代に拂渡したりと云ふ。

大父君獨り大に驚き、其肴屋の名を聞けば、生憎平日出入の者に非ずして、家內婢僕に至るまで之を知るものなし。君の憂慮ます／＼甚だしく、乃ち家人に直に肴屋に接したる者を召し其年齡容貌の大概より衣服、荷物、天秤棒の樣子に至るまでも逐一聞きて詳に記し、竊に藩邸の仲借（藩米を取扱ふ人足）を雇ひ、堂島に來る肴屋とあれば必ず安治川の雜魚場ならんとて之を物色搜索せしむること兩三日にして始めて本人を見出し、之を家に呼んで自ら事の次第を語り、先きの錢緡に不足の錢五文か十文を拂ひ、他に又煩勞を謝する爲めとて若干の錢を與へて、不注意の罪を肴屋に詫びたりとぞ。

此一條は當時藩邸の內外に知るものなく、吾々兄弟姉妹も極めて幼少の時のことなれば、假令ひ之を見るも之を解せず、其事情を詳にする者は唯汝等の大母一人のみ。思ふに大父の性質として名聞の嫌疑を避けたるものならん。然りと雖も事既に過去に屬したり、況んや君の長逝は四十餘年の古に在り、余は今日に在て此事實を湮沒するに忍びず、啻に福澤家の美に非ず、自から天下道德の美談と云ふも可なり。汝等生長の後は公然これを人に語て先人の美德を發揚せよ。又これを發揚すると共に己れ自から省みる所なかる可らず。此祖父にして如何なる孫ある可きや、汝等は名家の子孫なり。子孫にして先人を辱しむると否とは、唯汝等が一心に存するのみ。蓋し大父君は單に正直の一偏に依賴して身を立つるが

如き小丈夫に非ず、壯年の時より藩の會計官吏と爲りて、大阪の藩邸に在勤し、當時の富豪大賈に近接して財政の衝に當り、或は藩米を賣り、或は藩債を募り、金利の高低を論じ、返濟期限の緩急を談じ、時に或は金主の歡心を得んが爲めにとて共に飲み、共に遊戲する等、大阪町人社會の交際に俗中の俗を極めて、恰も二十餘年を紅塵の間に消磨したるが如くなれども、忙中自ら閑あり、一方には深く文事に志して、學流は堀川の伊藤仁齋、東涯の經義を悅び殊に文章を善くして詩も亦あり、野田笛浦の如きは親友中の一名なりき。左れば君の一身は俗吏なり、經學者なり、又詩文家なり、心事極めて多端、思想極めて廣くして一方に偏することなく、前記肴屋の談の如きは唯その素質の偶然にも溢れて事に發したるまでの事なれば、此一細事、固より以て君の平生を察するに足らず、余が持論に於ても、人の正直のみを唯一の德義と認め、畢生の能事終るとして一向に之に心醉するものに非ざれども、骨肉の私より汝等の爲めに謀れば、此細事も亦自から先人の言行錄中に現はれたる美事の一斑として紀念す可き所のものなり。今日幸にして君の生前に集められたる古錢八十七文の存するあり、彼の肴屋に渡したる錢緡中の古錢も必ず此中に在るや明かなり。余が年來身邊を離さずして少年遊學中も此錢ばかりは大切に携帶したる所のものなれども、汝等も亦齡漸く長じて數年の後は社會の一人たる可き者なれば、今此錢を分ち、其一分を汝等の間に分配して、今後修身處世の紀念品と爲し、一分は余が座右に留めて以を修身の寶鑑とすること舊の如くなる可し。

福澤の家は本と小祿の貧士族にして、餘財あることなし。余が相續のとき家にあるものは唯數百冊の漢書と、僅々の書畫刀劍とのみなりしが、是等の品も余が勤學中に賣盡して學資に供し、今に至りて汝等が爲めに先代の遺物としては殆んど一物もなしと雖も、假令ひ是れあるも今日錢を出せば買ひ得べきものに過ぎざれば、之を得ずとて遺憾に非ず、特り

此古錢に至ては千金を投ずるも買ふ可らざるの寶物にして、先人の餘光の存するものなり。今余と汝等と共に此餘光を被る遺物大なりと云ふ可し。謹で此寶物を失ふ勿れ、謹で此寶物の精神を忘るゝ勿れ。汝等子あらば之を子に傳へよ、孫あらば又孫に傳へしめよ。世々子孫福澤の血統、孜々勉强して、自立自活、能く家を治む可きは言ふまでもなきことながら、萬一不幸にして財に貧なるの憂あるも、文明獨立の大義を忘れ、節を屈して心飢ふるの貧に沈む勿れ

明治十一年二月五日　諭吉

一太郎其外へ

文苑

片割月

紫嵐

『………信様………お懐しうござんす。信様今夜だけは昔の、十年前の浪子と思召して、こう呼ばし下さいまし……今でも明瞭と胸に殘つて居ります、丁度今宵の様な優しい片割月の夜でござんした、信様がお母様に連れられて、それとはなしに御暇乞に御出遊ばしたのを、幼心にはお母様の御目の涙にも心付かず、唯信様が來られたのが嬉しく二人で手を引き合つて「お月様、いくつ」なんどゝ歌ひながら、町端の石橋まで送つて「さよなら〳〵」と呼び合ふうち漸次薄くなつて、見えなくなつてゆくお母様と信様の後姿を見送つた時、虫の知らせとでも申すのでござんせうか、理もなく、無性に悲しくなつて、ワッ

と泣き出して「信ちやん〳〵」と泣歔をしながら、いつかうと〳〵となつて乳母の背中で眠つてしまひましたが、思へば、あれが、あの夜が永い〳〵お別れでござんしたねあれから十…　今年で三年目……お河童に赤いリボンを蝶の樣に止らせた浪子が今は潰島田の三吉、扇屋の姉さんと云へば鼻垂の小僧でさへ「あゝ」とうなづくやうな……ホヽ、信樣……思へば……夢、悲しい夢でござんす。

『エ、信樣！何故〳〵この浪子を忘れては下さいませなんだ……信樣が此濱へ御別莊をお造り遊すと人の噂で知つた時浪子は物狂はしう思はるゝ程、泣いて〳〵泣き明しました。十幾年片時も忘れられぬ其人と同じ所に住みながら、遇ふ事さへかなはぬ吾身かと思へば口惜しさ、悲しさ、やる方なく信樣〳〵」と夢に迄呼んで起された事も度々でござんした。ほんに盡きた筈の涙、忘れた筈の人情、修業を積んだと思ひの外自分でも愛想のつきた意氣地なさ。……此月の初信樣が此濱へ御越しなされてから、何處へ

行つても其噂ばつかり殊に信樣が御年盛に御獨身をあれ、かれと口さがなく云ひはやすのを、知らぬ顔して聞く身は、いよ〳〵つらく、忍耐られなくなつては無理な自暴酒も…………。

『此間の夜　お座敷で、さんざ呑んで〳〵醉ひ潰れて歸つて來た上、又大きなコップで冷酒を煽つて居る矢先、思ひもかけぬ信樣の御手紙……「エ、こんな方は存じませぬ」と突き返してグラ〳〵となつたと思ひましたら、後は夢中、唯熱い〳〵さうなりつゝけ　醉が醒めると又苦しまぎれの馬鹿騷。三吉が氣狂になつたと評判が立ちましたさうな、……エヽ一層氣も狂つて呉れたならこんな〳〵……ア、氣狂にもなれぬ私は何んとした悲慘な女でござんせう。

『信樣！泣いて下さいますか……勿體ない！。あれから後の度々の御使にも其度毎に醉つた振りにして心にもない惡口雜言……「許して下され」と心で拜んで居りました

毎夜醉ひ狂うてはフラリと飛び出し、いつか此御

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

門前まで迷つて來ては……今夜も今夜……忘れられない此片割月……「さよなら〳〵」と振り返り〳〵闇にかくれた筒袖の信様戀しく懐かしく、狂ひ狂うて御宅まで………

『信様……さぞ〳〵呆れて御居でござんせう……もう浪子の意地も辛棒もこゝまで……せめて今夜だけ泣くだけ泣き喋べるだけ喋べらして……せつなうござんす……

『いえ〳〵もう云つて下さんすな、今更誰も恨んでは居りませぬ。みんな前世からの約束事、きれい薩張とあきらめて居りまする、……母がなくなりましてから足掛八九年にもなりませう、其時はまだ肩上のとれぬ十六、隣の三味線の師匠に可愛がられたのがそも〳〵の始り。いつか覺えた三筋の糸にあやつられて……氣の付いた時はもう片足泥だらけ、エヽ儘よと例の氣象、まつさかさまに泥水に飛び込んでしまいました。もう其時限り浪子は此世に死んでしまつたのでござんす。

三吉と名乘り上げたのは五年前それから後の事はつい此間まで新聞に續物で出て居りました位……アヽ信様も讀んで下さいましたか……何の〳〵僞でござんしよう……まだ〳〵あれどころでは……信様! それ程までに私は汚れてしまつたのでござんす……

『エヽ、これでも〳〵信様は……勿體なくて空おそろしい様でございます……信様! 皮一重内に環つてゐる浪子の! いや! 三吉の濁つた血の溫味を汚はしいとは思し召しませぬか……アヽ何んとした勿體ない御心でござんせう……

『……いえ〳〵決していけませぬ。何んと仰いましても泥水の底まで沈んだ此身體、どうして〳〵、昔の浪子に……浪子は五年前に死んだと申上たではございませぬか……信様! 今は御情がかへつて御恨でござんす……

○　○　○　○　○

『私が三ちやんの居ないのに氣がついたのは大暴風の次の朝。書置と申しましても私名宛でたつた一言

「許して下さい」とあるだけ……エー眞實の事情を知つて居たのは私一人でござんした……それにね可愛想に身につけて出たものは御邸の旦那様の七つ位の時の御寫眞たつた一枚。エ、御邸でも手前でも出來るだけ探して見ましたが死體すらも見當りませんでした。三ちやんの荷物はすつかりそのまゝお邸に差上ましてね、旦那と二人きりで泣きながら三ちやんの御葬を致しました……ほんに雨の音の靜かな淋しい晩でござんしたよ。三ちやんのお河童さんの可愛いお寫眞を御机の上にかざつてお線香をたきましてね、旦那と二人で御通夜をしながらしみ〲とお話を伺ふた時、私も生れて始めて心からあんなに泣かされました……ホ、思ひ出しましても意氣地なく涙ばかしこぼれますよ……ア、其旦那様でござんすか……エ、それから間もなく御別莊の奥の庭に『浪子の墓』と御自分で御書き遊ばしてお墓をお建て遊すと直ぐ御別莊を私にお預けになつて又外國へ御出になつてしまつたのでございますよ……今でも折々御便を下さいます……。

藝者とさへ云へば一口に犬猫の樣に仰いますけれどもね、やつぱり、こんな可愛想な話もあるんでござんすよホ、、、アラ、御話に身が入つて飛んだ御邪魔を致しましたこと……ではお休み遊ばせ」

夢のこと

久野恭子

弓子は自分の受持に成つて居る二階の伯父の書齋と、下の西洋間の掃除を濟ませてから、自分の部屋に入つて鏡臺の前に坐つた。起際に一寸束ねて置いた長い、ふさ〲とした髪を、兩方の肩へさつと解いて、目の荒い櫛でスウ〲と梳り乍ら、眼を大きく見張つて鏡に映る自分の顏を凝と見て居る中に、先刻は掃除の忙しさに紛ぎれて忘れて居た夢の事を又思ひ出した。

弓子はよく夢を見る、殆ど見ない夜はない。夢に、

は過去に在つた事を分明と見る事も有る。現在の事を見る時も有る。過去と現在と入組んで、取留もない夢を見る時も有る。が又、何うかすると、未來に有ることを夢見る時も有つて、其が又不思議によく當る事も有る。

弓子は木立の深い、大きい森の中を歩るいて居た、何んと云ふ木か分らない日本に見られない樣な木がたんと有つた。木の枝に葉が餘り附着いて居ない所を見ると、冬の樣でも有るが、草の工合を見ると春の樣でも有る、其森を、弓子はフラ／＼と歩いて居た。暫くすると、弓子の傍をチヨコ／＼と馳け扳けたものが有つた。見ると、ブロンド（blond）の髮を肩の邊りで奇麗にクル／＼と渦卷かして、エプロンに何か一杯草花を入れて居る女の子が、一寸振り返つて弓子の顔を見上げたなり、直に何處かへ往つて了つた。さうすると弓子は急に、今自分の歩るいて居る所がロシヤの森で有る樣に思つて了つた。誰かゝさう話したともなく、一人決めともなし、さう意識して了つたので有る。

うつとりと女の子の後姿を見送つて居た弓子は、又フラ／＼と俯向き勝ちに歩き出した。ふと顔を上げると、向ふの大きい木の下に、四五人の人が立つたり腰掛けたりして居る。其が丁度、寫眞でも寫す時の樣に、凝として身動きもしないで居るので有る寫眞なのか、眞の人が寫眞を寫さうとして居るのか能く分らない。其中の四十近い貴婦人に眼を留めて見ると、其人は永い間外國へ往つて居て、一番終りの赴任地で亡くなつた弓子の親類のSと云ふ公使の夫人で有つた。

「オヤ叔母樣なのね」と弓子は心の中で斯う考へ乍ら尙よく見ると、亡くなつた公使も居る。

「あゝ叔父樣も居らつやる、」と思つた。

すると向ふの方でも弓子の居るのを意識したらしいが、可笑しい事には誰も何んにも言はず、弓子も又言はないのに、兩方で種々な意味が通じ合つて居る樣なので有る。弓子には傍に居る三十位の若い貴

族らしい人が、ミハイロヴイッチと云ふロシャの伯爵で有つて、日本の公使の家族と親しくして居ると云ふ事も分つた。

其人達が立上つて、ドヤ／＼と何處かへ行く時、伯爵のミハイロヴイッチは、つと、弓子の傍へ寄つて來て快活らしい調子で笑ひ掛け乍ら、彼方を指さして斯う言つた。

「貴方は、彼方へ居らつしやると誰かに逢ひます。」

弓子は敎へられる儘に、又ソロ／＼歩き出した。

暫くすると、木立の少し伐り開かれた所へ出た。其處には池が有つて、水の面に水草が、青い葉と白い花とをもたげて咲いて居た。此處迄來ると、弓子は何んとなく此近いほとりに村でも有つて、會堂の鐘でも響いて來さうに思はれた。

鐘が響いて來たら、彼の水草は搖いで有らうと思ひ乍ら、立止つて凝と其花を見て居ると、後の方でサヤ／＼と云ふ衣ずれの氣勢がして、やがて自分の肩に誰かゞ手を掛けたらしい。振り向いて見ると、黑

いしなやかな絹の着物を着た五十位の品の善い女の人が、ひたと寄添つて、懐しさうな眼の色で自分を見て居るので有つた。

弓子は、自分も默つて暫く其眼許を見上げて居たが、何んとなく其人が「あゝ、さうかい、」と云ふ樣な、さもいぢらしいとでも云ふ樣な心持で自分を見て居る樣に思はれて、初めて逢つた人では有るが、何うやら自分とは前の世からでも目に見えない不思議な線で繋がれて來た人の樣な氣がして、何人とも云へない懐しさが漲る樣に胸に推し寄せて來た。でさう言はなければならないものゝ樣に其人の腕に掴まつて、斯う聞いた。

「貴女、あの、これから弓の母に成つて下さるの。」

女の人は、につこりと點頭いた

弓子は「あゝ弓にも母が出來た／＼、もう好い」と思ふと母に成つてもらうのが嬉しい樣な、其人が懐しい樣な、少しは極りの惡い樣な、種々な氣がして、其人の胸に顔を推着けると、何の涙とも知れな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

いのがハラ〳〵と出て來て、央ばは甘へる樣な氣にも成つて、弓子は黒の絹の上に顔を着けて、此度もなく泣いた。

弓子は髪を梳り乍ら、昨夜見た夢を頭の中で斯う繰り返したが、何故平常少しも懷しいとも、行きたいとも、見たいとも思つて居ないロシヤの夢なんぞを見たのかと思つて、不思議で耐らなかつた。亡なつたS公使もロシアには往つた事はないので有つたそれにミハイロヴイッチが、弓子には可笑しかつた弓子は英國人にも、米國人にも知つて居る人が有り獨逸人にも一人有つたが、ロシヤ人には一人も知つて居る人はない、もつとも、名丈聞いて知つて居るのなら少しは有つた。弓子は一々其を、ツルゲネーフ、トルストイ、ゴルキー、チエホフ、アンドレーフと頭の中から引き出して見たが、ミハイロヴッチと云ふ名は、何處からも出て來なかつた。で、とかし終つた髪を一束に左の手で握りしめて「ミハイロヴイッチなんて可笑しいわね」と少し濁んだ聲で鏡の中の自分へさう言つて、ニッと微笑んだ、が弓子は、未だ見ないロシアの國を歩いたと云ふことよりも、ミハイロヴイッチと云ふ若い貴族に遇つたのよりも、それよりも、あの黒いしなやかな絹の着物を着た人が懷しかつた。

何うして夢で彼の樣な人に逢つたので有らう夢の人なのか、眞に此世の何處かに生きて居る人が夢に入つたのかと一向思ひ惱んだ。弓子が母に別れてからは、自分の周圍から受ける愛情の中で、一番甘へると云ふことに於いて饑を覺えた、甘へる事の出來る人が自分にはなくなつたと思ふと一番其が厭で淋しかつた。それなので弓子は、自分の育てられて居る伯母にでも、甘へて我儘を言つても見度いのであるが、伯母は大勢の子持であつた。從兄弟達は兄弟が大勢なので、誰もそんなに我儘を言ひはしなかつた。弓子より年下の從弟妹でもそんなに甘へては居ない、弓子は幾ら伯母が眞個の子と同じ樣に自分に優しくして呉れても、其從弟妹達の手前も有り、又

もう揚のなくなつた自分の肩の手前も有つて、さう〳〵小さい子の樣に甘へる譯には行かない。甘へられないので尙の事弓子の心の底には、始終此の甘へたいつと云ふ欲望が潛んで居て、何かの刺戟に出遇ふと、容赦もなく頭をもたげては弓子を惱ました。

弓子は彼の夢で逢つた人が何んとなく戀ひしくつて、又夢の中でゞも好いから逢いたいと思つた。逢つて昨夜の樣に甘へて腕に摑まつて、胸に顏を推着けて、嬉しいのやら悲しいやら分らない淚で、譯もなく泣いて見たかつた。

弓子は髮がたくさんなので、其をこなして、前髮を分けない一束のルイザを氣に入つた恰好に結上るには、一寸骨が折れた。

好い形に結上つた。橫の詰つた、前の少し高めな髮を鏡に映して居たが、終には髮の形を見るよりも鏡の中の自分の瞳を靜と見始めた。そして一寸首をかしげながら、につこりして「貴女、又、彼の女に逢いたいの」と其鏡の中の眼に聞いたが、やがて兩方で、こくりと、點頭き合つた。

うめくさ

トルストイ翁の婦人觀

○婦人の善行も、男子の善行と同一なり。卽ち節制眞實、善良、是れなり。然れども同じ善行も、婦人が之を行ふ時は、特に美しく見ゆ。

○大なる都會を通過して、大なる商店に於て鬻げる所の物を見よ。數百萬圓を價し、而して數百萬人の勞働者の困難なる勞働、時としては勞働者に有害なる勞働に依りて、製作されたる物を見よ。總て是れ婦人の用ふる奢侈品なり。斯の如きものは、無くとも差支へなきものなり。

○愛を以て人類に顯現する神に、自巳に與へられたる慈母的獻身力を傾倒して事ふる純潔貞操なる處女は、最も美しく、幸福なる人なり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

隨感

國民に豐富なる信仰を與へよ

廣岡淺子

現今の我が日本に於ては神の御前と云ふ觀念を國民一般に養ふ事が、何よりも教育進歩を補ふ、急務中の急務であらうと思はれます。維新以來我國の思潮は長き歳月、科學萬能主義の物質的文明の眠りに耽つて居ましたが、此節少し其夢が覺めかけた樣に思はれます。國民が餘りに薄志弱行にて、何れの方面を見ても利己一點張に傾きたるより、文相は學校教育の惡弊を改善し、道德教育を專ら奬勵されたるは、大に賀すべき現象であります。亦同時に各新聞は大膽にも其理論に就て種々の方面より眞卒に論究され、而も其論說は豐富なる智識と、進歩的學理とを以て公平なる辨論を試みられた。必近き將來我教育界に一進歩を來すであらうと、實に歡喜を以て拜讀いたしましたが、唯惜しい事には人類教化の泉源とも云ふべき宗教問題に就て、一言一句も論究に及ばざりしは、世界强國の仲間入したる、廿世紀の日本國民としては甚だ物足らず、玉に傷とや申べきか尤德育と宗教とは密接なる關係を有する事は論を俟ずと雖、我國人民の多くは宗教思想に乏くして、根本の宗教的靈育を等閑にしたる結果、今日の如く薄志弱行の國民を養成したるにあらざるか。もとより宗教は愚夫愚婦を導く法便にあらず、地位ある人々は勿論、最高識者の輩、擧つて信仰の眞理を眞面目に研究し、人格の龜鑑を實現爲すべき教へであります。然るに我國の學者は宗教を研究するに當り、只頭腦にて論究する而已に止り、實行的現象の信念に及ばざる爲め、反て曲學阿世の徒を現出するにあらざるか、基督宣まはずや、馬太傳二三章の二七節に「噫なんぢら禍なる學者とパリサイの

人よ、爾曹は白く塗たる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、内は骸骨と諸の汚穢に充」と現今の社會にも亦斯くの如き僞善者充滿するの感があります。宗敎は議論にあらず、直覺的信念であります。罪の自覺に始り、努力奮闘の結果悟得したる人格の養成であります。宗敎の實驗無き人々は先思考するであらう。自己は從來何等罪惡はなさぬと、斯如き傲慢心を有する人々も、一旦基督を學び、基督を通して神を知覺し、信仰に進みし時は、自然心情が淸く、謙遜となり、聖なる神の御前に於て、自我の罪惡を認識するに至ります。此の潔く尊き實驗を得て後、宗敎の極致を論究する資格が出來得るであらう。どうか男女の別なく愛國の識者諸氏が、人類敎化の根本なる宗敎思想を充分に養ひ、先進諸國と比肩して耻ぢぬ精神的國民が多く實現する日の遠からざるを切に祈る次第であります

身の光は目なり

一記者

何時かの思出でありますが、未だ木枯の吹き荒む頃の或夕、私は子供と共に何處からか歸家する途中もう門前にさしかゝつた時、向ふの方から若い男按摩が暗みの眼を一本の杖に便りて參りました。私共は寒くはあるし、夕暮ではあるし、只もう早く歸り度いと思ふ斗りで、余念もありませんでしたが、口中が砂塵で何ともいへぬ氣持の惡さに、うつかり唾を吐きました。處が丁度程近くに來たその按摩が血相を變へ、杖を振り上げて私の方に寄つて參ります私もびつくりしましたが、子供は眞蒼になつて、垣根にすくんで身動きも出來ずに居ります。『何だ盲人だと思つて失敬な』とばかり、たゞならぬ容子の氣味惡るさ、何う仕樣かと一寸困りましたが、つとめて言葉優しく少しも心なくした事だから、何卒怒らないで宥して下さいと一生懸命に詫びました。そ

の光景を見て居た近處の惡童連中が、余り樣子が可笑しいのでくす／＼笑ひ出しましたが、此度は其方へ杖の暗打を向けて、虚空を切つて居ます。段々面白いさいつた風に、大勢がわい／＼さわぎます。私は惡戯の張本人になつた樣で、氣の毒な思ひと可愛想な念にたへませぬでした。けれども此場合急いで垣根の子を引立てゝ門に入りました。誠に身の光は目なりで、此按摩は目一つの暗みに全身を包み切つて一寸の光りも熱も自から防ぎ、身と共に心までが地獄の暗みに縮み上つて居るその痛ましさ、到底見るに忍びませぬ。如此な人はもう大抵の惠みや濕みでは生命にかへる事は出來ますまい。床下の暗い處に濕つた冷めたい黑い土にはへた草は、始めから色までが眞白で、光りに會ひ、熱をうける其れを限りなき惠みとも知らず、萎れて枯れて仕舞ふ、丁度その樣なものだらうと思ひました。私共は幸にして肉體の目に病氣を持ちませんから、ありとあらゆる萬象をそのまゝ、色をつけずに見る事が出來ますけれども萬一私共の心の眼にくもりはないでしようか、或はなげき悲しみさま／＼のいたき鞭を以て、神樣は私共に臨み玉ふ事がありましても、私共は何卒して素直な心におうけしたいと思ふ。天地に滿ちて居るその惠みを最も多く受け入れて、光りの子となる爲めに、私共はつねに心の眼にくもりなき樣に心がけ度いのであります

所謂日本調子

小此木松子

或先生の仰いますのに、日本に永年居られた西洋人は、其母國語が日本語化して居りますつて。是は成る程、さうありませう。宣教師などに於ては、其國化した事は大に誇とせらる可きのかも知れませむ是れと同樣、歐米人でも久しくこちらに居られますと、其頭の工合、心の調子といふ樣なもの迄が、大に日本風に變る樣です。此日本調子といふのが、一

種言ひ難い特徴のあるもので、自ら其傾向を持つて居る吾々にさへ餘りよい感じばかりは與へませむ。まことに殘念な事ですが、他國人にはさぞ嫌な氣分を起させるだらうと思ふと、却つて始めての外國人などには、夫れは大層優しい、平和な、圓滑な美風の樣に解釋される樣です。但し少しく解つた人には他の半面も間もなく見出されます。そして大分苦い批評なども伺ひました。一體、何の事を言つて居るとお思ひの方もありませうが、先づ申せば、極めて淡泊で無い、眼の前主義の、徹底しない態度氣分とでも云ふのでせうか。勿論個人〳〵で違ひますが、同じ程度の北歐人或は北米人と我々とを比べて見て何方か俗にいふ「交際易い」かといへば、飾りの無い方がとは答へる迄もありません。口で「そやし」て心で笑ふのが、日本男女の特徴では、餘り大國民を氣取るのも如何でせうか。

拔萃帳

森田松榮子

拔萃帳を見ると、自分のは半言隻句もないのに、自分の過去の内的生活の狀態がいかにもいかにも鮮かにあらはれてゐる。自分にとつては日記よりも、自分でかく日記よりも、時としてこの他人の句をかきぬいたものゝ方が、却て自分の生活を分明にあらはしてゐると思ふ。自分は日毎々々に日記をつけることはしない、けれど、讀んだ本の感じた所は必ずかきぬく。尤も此頃のやうに讀まないと、過去の一月分の拔萃帳は一年もあるかもしれない。も少しよまなくてはならないとおもふ何にしても。

しかし又折々の感想をみづからかきつけておくのも、必ずしも自分にとつてはむなしいことではあるまいと思ふ。屑籠へ葬られ損なつた古い手記の中からこんな文句を見つけた。それは昨年の六月の十六日の日附である。（日附をかいておくことは或は興味

以上の必要があるやうである)『……ぞ讀み了る、最後の「然らば基督教徒となるは人生の第一義にあらずや」といふ行を繰返した時には涙がこぼれた、自分に解きやうのない涙が……』とかいてある。之を書いた頃の暗闇のもだえを思ふと、今でもからだかわなゝいて、胸が痛くなるやうな氣がする。信仰と理性(智識)とは永遠に闘へるものかといふ樣な疑に悶えてゐた時から、信仰に反するものは理性にあらずして、不信なりといふことのわかつた生活。自分は過去の疑にみちて苦しんでゐた生活をふり返る勇氣はとてもない、けれどけれど、あの拔萃帳と手記その中にはふるへわななく樣な過去の內的生活を告白するものがあつても、自分はどうしてもやぶりすてることが出來ない。道があるとも、道がないともそのどちらかを知るまでと　立てたこゝろざしには自分は忠實で眞面目であつたのである。自分は自分が其時の正しい眞面目な動機と努力そのものをいつはるには堪へない。小さな拔萃帳よ、この中におさめられたる人々の言葉をして、いつ迄も我が心に活かしめよ、かくてこの中にあつまれる人々をして、主義をとはず、信仰をとはず、われに法友とよぶことをゆるせ。

今日の日本の建物

カアザリン、マグドナルド

この頃私共の家を借りる必要があつて、隨分東京の彼方、此方を見て歩きました。それでお世話下さる方も、西洋人といふ處から洋館がよからうとの事でどこそこによい家があるといふので、行つて見ますと、洋館には一つも氣に入つたのがなかつたのであります。なぜかと申すと、西洋の風を知らない人々が、設計したと見えて、窓の開き方、梯子の工合壁の塗り方、間取りなどが、まるでなつて居らないのです。甚だしきは新らしい立派な洋館でありながら、食堂に水洗ひの水をれい〳〵と引いてあつ

て、「これは、食事の時、お口をすゝぐ處です」と申さるゝのです。凡てかやうに便利と思つて作られた處が、私共には非禮にさへ當るやうなものでした。やはり私は日本の大きな家を好みます。床の間、壁の色、欄間の彫刻、襖の模様が、いかにも美術的である斗りでなく、部屋がシンプルで、その色彩等がいかにも人の氣を落付かせます。殊に日本の座敷のシンプルなのは、大變よい習慣と思ひます。私共の國では、部屋に何んでも飾り付けますので、母親は始終子供に「これに觸つてはいけない、彼れをいぢつてはいけない」と云ひ續けなければなりませんが、日本の子供さん方は、自然にその小言を免かるゝ譯です。それで私もどう〳〵立派な日本の家を探し當てゝ、大層嬉しう存じて居ります。

墨國より

小橋陶子

當地の人は東洋と西洋の中間の血統をうけたる人

多し。漆黒の髮、瞳も黒き人多し。日本の片田舍より文明なれど、日本の都會より野蠻なり。當地の人も追々おごり來て、此頃は靴をはく女多し。日本の田舍にても、人は洗足ときまつたもの。昨年は洗足の人多く、靴をはきしものは珍しかりしが、今は然らず、變遷はげしき處なり。此地にありて聖書をよむに、さながら親戚の間の出來事の記錄の如し。此地の人の生活甚だ似たる故なり。マリヤとかヨセフとか云ふ名人と近く住み、又十二月廿四日クリスマス、イブに私共の家庭にハナ子恵まれてより、今まで思はざりし樣々の興味と情味生ず、御參考にならば書き送り申度し。

人の生るゝは實に自分の力にてはあらずと深く深く感謝致し候、その夜寺々の鐘、このよき日を喜び鳴らしつゝけられしをきゝつゝ、傍なる幼き生命を見、二千年の昔の今日、馬小屋の隅にありし母君とおん子を思ひ、この幼きものゝ行末を思ひ、無量の感に打たれ、心よりいのり申候。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

時事其折々

一記者

▲李容九の逝去

久しき以前より肺患を病んで須磨に療養中であつた朝鮮の名士李容九氏は五月二十二日午前六時遂に永眠した、氏は素と微賤の出であつたが幼にして英才群童を拔き侍天敎の信者として名聲一鄕に高かつた日露の戰爭が起つた時氏は一進會を率ゐて日本の爲めに盡力し或は軍隊の輸送に或は軍用鐵道の敷設に劃策頗る勉めて我國の便を計つた事は其當時から世の知る處であつた、而して露國が韓半島から全然一掃されてからは率先して日韓合併を主張し明治四十二年十二月日韓合併の上奏文を韓皇帝に奉り同時に曾禰統監及び內閣總理大臣李完用に上書するなど其熱誠はよく韓國の上下を動かしたのは彼の大業の成就の上に實に尠からざる功があつた、面白いは其後の氏の意氣である、四十三年合併の事が全くなるや氏は我が任務茲に終れりとし、官位を求めず富貴を願はず、一進會を解散すると同時に我國に來り悠々風月を樂しんで、生を送るに餘念なかつたと云ふ事である、氏の葬儀は京城で我神葬祭式に依つて執行する筈で去月廿五日須磨にて還魂式を行ひ遺骨は直ちに侍天敎會堂に送ると云ふ事である尙ほ新聞紙は氏の臨終の模樣に就いて哀れ深い物語を報じてゐる當時宋秉畯氏は須磨華壇に滯在して氏の病氣を憂ひて居つたが二十一日午後九時いよ〳〵危篤に陷つたと云ふ通知を得て其病床に臨み確かりせよと勵ました時李容九氏は「今此處で死ぬ位なら日韓合併前に死んで居つたら」と云ひながら潸然として落淚したと云ふ事である。最後の一句誠に氏の苦衷を想はせるものがある、傷ましいかな、享年四十五

▲全國中學校長會議

去月六日より文部省にて全國中學校長會議が開かれ寄宿舍問題や受持時數增加など種々なる問題が協議されたが、修身に關する議題のあつた第四日目には長谷場文相特に出席し、親しく其協議に與つた、當

日委員長杉浦重剛氏は中學校生徒の德性上不充分なりと認むべき點如何、且つ之を補正する適法如何と云ふ、文部省の第一諮問案に對する委員會の答申案の報告があつた。卽ち

中學校生徒は其の思想性格未だ充分に發達せず、又地方の情况により多少其趣を異にすと雖も、之を通觀するに道德的信念猶ほまだ强固ならず、動もすれば社會の弊風に感染し易き恐あるを以て、一層其涵養に勉め、誠實にして責任を重ずる事、勤勉にして勞作を愛する事、剛毅にして質朴の風を尙ぶ事、禮節を守る事等は特に盡力を要する事と認む、而して之を補正する方法としては職員の選擇を一層愼重にして、職員協同して躬行實踐を旨とし、正確に敎授し、懇切に指導し、生徒をして自覺自治の念を發揮せしむる事を期すべきなり

委員が中學校生徒に對して特に其必要を認むと報告した處は、取りも直さず、現今中等敎育の缺陷を表はしたものである、世の父兄は此點に注意を拂はねばならぬ事と思はれる、德性涵養問題は最も重大な議題だつたので、委員の間にも盛に論戰が交はされたか、菊地謙二郎氏は

中學生の道德信念を弱しとするも之を敎ふる敎師及び校長自身の道德的信念は如何、自分は弱かるべしと信ず、

と云ふ樣な寧ろ敎員の德性の側に着目した人もあり又鈴木券太郎氏は

中學校生徒の缺點は敬虔の念乏しきにあり、和平の念乏しきにあり、之を矯正するには機會ある每に健全なる人性觀を指示し、天を畏れ人を敬ふの念を涵養するにあり、

と云ふ修正說を出したが、敬虔　畏大の信念がないと云ふ缺陷に對する矯正策に就ては、說明者自身も甚だ不明のやうに見えるが、此事に關しては全體として遂に何等纏つた議決を見るに至らなかつた。

▲ウエールス國敎廢止案

愛蘭自治法案に次いで英國今期議會の大問題となつて居るのはウエールスの國敎廢止案である、ウエールスは英國の西隅に僻在する一小地方に過ぎないけれど此一小地方に於けるアングリカン敎會の特權を剝奪し、敎會の財源を國家に沒收すると云ふ事は啻だにウエールス人民の敎化の上に大なる影響を及

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ぼすのみならず、延いては英國全體の國教を危地に陷るゝものであると云ふので保守黨側では全力を盡して反對して居る去る廿三日內務大臣マッチナ氏に依りて下院に提出せられた「ウエールス及びモンマスシャイアに於ける國教の設置を廢止し幷に其教會財產を處置する法案」と云ふのが卽ち其れであるが既に一讀會は通過して今週中に二讀會に附せらるゝ筈である。此案も愛蘭自治案と等しく自由黨政府が非國教徒を代表するウエールス選出の多數議員の後援に對する報償として提出したものであると解せられて居る限りは、下院は勿論通過するであらうが上院の通過は到底覺束ない今後此案に對する賛否の論戰が如何に激甚を極むるか想見す可きである。

▲人道步行の勵行

市內の道路にて人道と車馬道の區別ある所に於ては橫斷其他止むを得ざる場合の外、決して車馬道を通行すべからざる規定あれども近時漸く此規定を無視するもの多く爲めに車馬と衝突負傷する等危險事故の發生少からざるより、今回警視廳にては之れが取締を一層嚴重にすべく各警察署に通牒を發したり、其大要は(一)人道の設けある道路に於ては幅の廣狹によらず、步行者は必ず人道を通行すべし但し雨雪等の日にあつては一間未滿の場所に限り幾分斟酌を加ふべく、又祭典緣日等の場合は臨機の措置を取るべし(二)道路の一側のみに人道を設けある場合は該道路の中央を境ひとし其人道なき一方は車馬と同時に步行するも差支なし、其他電車を待合はす時は例外なり、又團體乃至長大の物件を所持する場合は成るべく車馬道を通行すべしと云ふにあり、右は七月一日より愈よ勵行すべく、違犯者は道路取締規則に依り三十日未滿の拘留又は二十圓未滿の科料に處すべしと云へば步行者は各自注意あるべし。

新刊紹介

○理想の婦人及家庭　　實業の日本社發行

此書の實名は「名流大家の觀たる婦人及び家庭」と題する長き名でありまして、成瀨仁藏、安部磯雄、大隈伯、服部綾雄、三輪田元道の諸氏、女流にては津田梅子、棚橋絢子、三輪田眞佐子、下田歌子、鳩山春子、海老名みや子諸氏の講演及談話を集めて一冊としたものであります。健全なる讀物として一般におすゝめ致します。

(定價四十錢)

編輯部より

▲誌友故金森小壽夫人の逝去を痛み、その靈に捧げんが爲め、本誌は此處に大部分を割きてその追悼談を掲げました。こは獨り本誌に力を盡されし先輩として紀念せんと欲する斗りでなく、稀に見る賢母良妻としてわが婦人界に紹介しその感化のなほ廣く及ばん事を希ふたからであります。讀者諸氏にも必ず意味深くお讀み下さる事と存じます。

▲讀者諸姉から遙々御親切なお手紙を寄せられ、師なき友なき里に本誌を通して神の教へを聞き、樂しき日々を送らるゝ事や、或は家事に忙しき朝夕、本誌を繙きては靜かに修養の道に志し、尊き父母の訓誨を聞くがやう覺ゆるなど、身に餘るお言葉を頂戴致します。一々お返へしは出來ませぬが、同人一同は心よりわが婦人界の爲めに善かれと祈る誠の開かれてかと深き喜びを以て拜見致します。どうぞ皆様、たゞ一片の讀者としてのお交りでなく、眞の朋友、また姉妹の如く思召して、益々その消息を御洩し下さいまし。

▲別項宮田脩氏の談話に見ゆるやう健全なる讀物を我が讀書界に供給する一助として、外國の文學を平易に飜案したらばいかゞかとの御意見がありますが、丁度本誌にはワグネルのローヘングリンをやさしき物語にしたのを掲ぐる積りでしたが、記事輻輳の爲め次號に回しました。どうぞ樂しんでお待ち下さいまし。

▲不順の折柄皆様折角おいとひ遊ばしませ

（編者）

定價

（郵稅加算）	内地及朝鮮支那	外國
一部	金拾貳錢	金拾六錢
六部（半年分）	前金七拾貳錢	前金九十貳錢
十二部（一年分）	前金壹圓四十錢	前金壹圓七拾五錢

廣告料

一行（廿三字詰）	金廿五錢	一頁	金拾圓
四半頁	金三圓	内表紙	金拾貳圓
半・頁	金五圓	外表紙	金拾八圓

猶ほ引續き御廣告の向へは特別大割引可仕候

摘要

▲本誌代金は總て前金にて御拂込み被下度候

▲郵券代用は一割增の計算にて御送附被下度候

▲御送金は振替にて拂込ろゝ方便利に候但手數料金壹錢御加へ被下度候

▲通信、爲換、寄贈雜誌等は必ず發行所宛に願上候

明治四十五年五月二十五日印刷
明治四十五年六月　一日發行

發行兼編輯人　東京市小石川區林町四十三番地　海老名彈正
印刷人　東京市小石川區丸山町四番地　相原一郎介
印刷所　東京市赤坂區田町五丁目十一番地　齋藤活版所
發行所　東京市小石川區林町四十三番地　新人社
電話番町二五四四
振替貯金口座一四〇〇五

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新人第拾參卷第六號目次

（六月一日發行）

●社説

人生の眞義　主筆

●教壇

光明の生活　海老名彈正

●想苑

既成宗教に於ける分解的作用　渡瀨常吉

ショーペンハウエルの最高善と基督敎の再生說　福井菅太郎

予の見たる禪觀　金子白夢

敎會の潛勢力　中村長之助

●雜爼

聖書研究者の見たる本多君　內村鑑三

波多野精一博士を訪ふ　聖山生

米國風景論　海老名一雄

初夏の頃　野口せい子

黃櫻の陰より　鈴木重威

米國記者物語　春舟郎

他山の石　原の人

●講演及講義

基督論（二）　海老名彈正

馬可傳講義　同

●評論

與へられたる個性問題　快堂

最近の創作界概觀　白夜生

●時評

榊保三郎博士に答ふ　海老名彈正

櫻田義擧錄と文部省　楠男

私學勃興の徴　同

マグダ劇興行禁止　侃々生

偉人を要する國　K生

▲彙報▲編輯だより▲新著紹介

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第三巻 新女界 合本

殘本僅十數部　定價金壹圓（送料共）

◉社説　（安井哲子）

▲死ぬ迄働き續ける元氣▲無意識の感化▲個人の歴史▲奮闘と慰安▲他人の喜びに對する同情▲趣味のいろ〳〵▲過つて改むるに憚る事勿れ▲懐かしい十年前の夏▲温情▲勇氣▲犠牲の精神▲心の準備

◉講壇　（海老名彈正）

▲現代婦人の缺陷▲永遠の生命▲恩惠の聲▲柔和の福音▲誤解せられたる基督▲女子の解放▲愛苦の眞義▲神の聖愛▲向上の動機▲基督の家庭▲基督教の眞髓

◉想苑

▲新らしき生活　谷津博士
▲現代女學生の惡傾向　小此木松子
▲禮義の根本觀念　三谷民子
▲亞米利加だより　海老名一雄
▲かあやん　德富健次郎
▲現代小説雜誌　小山東助
▲湯臺叢話　谷澤直秀
▲獨逸見聞記　吉野作造
▲婦人解放の是非　宮田脩
▲佐久間大尉の手紙　德富健次郎

▲矯風問題　島田三郎
▲女子の教育の標準　村田勤
▲婦人の活氣　小此木松子
▲伊香保より　野口精子
▲形式道徳の無能力　村田勤
▲土耳古の話　小松武治
▲惠み多かりし二夏　三谷民子
▲夏の巴里　藤島武二
▲西班牙の夏　湯淺一郎
▲常樂の生活　二宮貞子
▲子女教育に對するの母の務　海老名みや子
▲婦人と信仰　海老名彈正
▲「アンドリヤ、デルサト」を讀みて　三谷民子
▲無題錄　小此木まつ子
▲女子の高等教育論　ジヨルダン博士
▲我國女子の將來　成瀨仁藏
▲婦人解放問題　内ヶ崎作三郎
▲男女問題の意義　安部清藏
▲淨心錄　谷澤直秀
▲世界最大の美　宮川經輝
▲文欄▲家庭▲雜俎▲衞生▲隨感▲其他種々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

入院診斷後應需
松田、林、峰間、三副長は目下當院に在勤
電本 八八八（病院用）
　　 八九八（私宅用）

東洋內科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋南

院長　醫學士　高田畊安

南湖院

相州高座郡茅ケ崎町海濱從停車場半里

電話ちがさき二番

河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤

院長歸朝仕候

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新女界第四卷第六號

明治四十五年六月一日發行

明治四十二年三月廿九日第三種郵便物認可

東京市小石川區林町四拾參番地
新人社
振替口座東京一四〇〇五